

米須部落は、旧真壁村真壁と伯仲する南部の人口戸数において倍以上おおいした。しかし、各個人の記録は、特異なものというのではなく、むしろあの戦争体験者としては、みんなが経験したことといつていい。そうではあっても、心を留めて読めば、各人各様、戦争の実体を現わしていることはわかる。

米須部落は、旧真壁村・宇真壁と併存する南部の人口戸数において、一、二を唱えられる部落であつたようで、戦前戸数が約三百七十五戸、人口在住者が千五百名を越したそうである。

帰られると、う捕虜収容團生活は近くの旧真壁村名城であった。

いた生存者米須部落のものは、一人も濡れなく名城に集まつたことと思う。北部に疎開していた人たちも、わが部落への帰心、矢の如くと古い形容をしてもいいと思われる。

（召集されていた十一名が台湾から帰つて来たので、百二十一名になつたことを、みんながはつきり記憶していた。

米須の戦後人口は、三百五十人から四百人の間であつたそうだが、他府県疎開、在住していなかつた他府県や外地移住者たちも帰つて來たので、やつとそれだけの人口となつたのであらう。米須部落に、米軍上陸の四月一日当時にいた人で、生き残ることができたのは四十人以内ではなかろうか、という方もいた。米須部落の人口千五百人中、戦争の犠牲になつた人命は、千二百人は越すのではないかと思われる。

一家全滅が、二百七十戸の四十七%に達している、驚かざるを得

人たちも、沖縄地元の人たちも、毎日参拝し、いつ行っても新鮮な花が供えられている。このひめゆりの塔所在の米須部落の二十六、七年後の今日に心を留めて見る人がどれだけいるだろうか。あの空き屋敷、一家全滅して、そこに家を再建して、それ等の家の祖先、位牌を崇める人がいないところもあるかも知れない。ちよと氣をつけたら車の中からさえあまりに空き屋敷の多いのが見られ

米須の部落の各屋敷内を初め付近一帯の遺骨は、万をもって数えることを記録の中にも書いていて、遺骨は何年間に亘つて大量に収骨され、今日もあちこちからまだ拾集されるそうである。

終戦三、四年、芋蔓が異常に繁茂し、南瓜のような大きな芋が出たが、そこには、人間の遺骨がまつてあつたということで、茅などの異常繁殖の場所には、鍬を入れたら必ず人骨が出たとみんなが話した。

波平幸進(三十九歳) サイパン引揚

四十七%は百二十戸で、その一家全滅人員は、前記の割合から計算すると五百人を越すことになる。千五百の字民中全滅家族だけで、五百人を越す、一人あるいは二人残った戸数の犠牲者を加えると、最初に述べた九名家族中一人だけ生き残っている例などと思ふ較べて、米須の犠牲が、千二百名あるいは千二百名と推定して、大体

と、六、七十%に達するのではあるまいか。  
一応各人の談話後、戦前の部落の一方のはしら一家全滅の家名  
と人員を三十五軒のところまで思い出して貰つた。

南洋から引き揚げて来たのは、一月の六日（昭和二十一年）でしたから、六日に名城に入り込んで来て、一月の八日に現在の自分の家へ来たわけですよ。それも、名城から直接大通りからは歩けない。福地にはアメリカ兵のキャンプがあるし、小波蔵の部落を越えて、糸洲越えて波平のうしろから、現在のひめゆりの塔のうしろ、山手の方から上つて来たわけですよ。ひめゆりの塔の山を上つて来

て部落に入つて来たら、石垣という石垣は全部崩れていたので、どこの屋敷やら見当がつかないんですよ。想像で、ああ、この辺はどうこの屋敷だったなと、木も全部焼けて、野原になつてますから、わからぬわけです。

わたしとは同年生で、わたしの親の屋敷の隣りの仲宗根という屋敷へ来たら、二十名くらい転んでいるんですよ。死体が。それでどこの屋敷も同じかなと思ってあちこち歩き廻つたんですが、どこの屋敷も五名から六、七名、十名やら、死体が並んでるんですよ。後はさびしくなつて自分は引っ返しましたが、見られたものではなかつたです。

それから名城で三ヵ月ぐらいだったですか、三、四ヵ月は暮したでしょうね。それから米須に引っ越し命令が下つたんですから、ちょうどあの時は、南洋から連れて來たうちの長女がハシカで疵だらけですよ。顔、頭、足の先まで、見られたもんじやなかつたんですけど。自分の子だが、あんまり臭いがひどいので負んぶしきれないですからね。この子は大丈夫かなと、わたしはうしろを向き向いて来ましたがね。それで村に来て一ヵ月くらいしたら、ぱつとその水疱瘡とハシカが枯れたんですよ。その疵が。でも枯れても疵は真黒ですよ、疥癬の疵みたように。その子が一生涯これでは大変だなと思っていましたが、年が経つにつれて、次第しだいに疵は取れ行きましたがね。

だからその子が、水疱瘡とハシカにいつべんにかかつて重態なもんですよ。僕のお母さんが、わたしが負んぶするからお前は荷物を担いで行きなさい、と言われたもんだからそうしました。

山城加那さんもあの時は大変御苦労されたんではなかつたですか（山城さんは、その方の三和村全部の指導員であった由）。坪数は、戦前より大きくなつていたのですかね。

註1 戦前の坪は大きく取られていたので、全部の家が、坪数は広くなつたとの話し合いが出た。三和村全体が、図面も土地台帳も皆無で、これを戦前の所有土地を、場所と坪数を正確にする仕事は困難なことだったようだが、案外、巧く行つたようになんが話し合つていた。そうして土地台帳と図面作製をしたことも話された。

註2 波平さんのサイパンでの日本在住民の惨苦が、沖縄県民の戦争記録と似ているので、参考記録として、一鈞を挿入する。

十九年の六月十日だったでしようね。空襲を受けたわけ。その時われわれ在郷軍人分会は連隊に集まつてたが、心配でならなかつたので、連隊からうち飛んで来たわけです。もう上陸、空襲になるから、また、前もって海軍甲板下士官を、僕は知つていましたよ。それで僕は、家を見て来るから時間と下さると甲板下士官に頼つたんですね。そうしたら、いきなさいと許可を与えてくれたわけです。

その下士官は、陸戦隊の部下を扱う人でした。それでうちへ行って見たら、家族は誰もいない。うちの後には防空壕がある。鐘乳洞が。カナリラ鐘乳洞といって、その鐘乳洞に行つて見たら家内や子供がいた。それで、別に変つことはないかと訊いたら、みんな無事だという。だが心配になるのは、もう二、三日後にはお産だとい

それで自分としてはボツボツやつて行こうと心を定めてやつていて、それが、部落へ帰つて二か年目に後の家内を貰つて、まあ働いたましたが、部落へ帰つて二か年目に後の家内を貰つて、まあ働いたわけですよ。それから後は何事もなく來たわけです。

南洋から来て、部落はたしか、どこも松やいろいろの木があつたのに、面白くなつていてるのを、強く感じました。それから部落に帰つてですね、来て当時、兎が三千円、豚が一萬円と価格がついて来るんですよ。それもお金のある方は買うことができるが、われわれにはどうしても手がない、高値で買うことはできなかつたんですねが、後十年後には、肉一、二斤でも客戸で食べる事ができるようになりました。うかという思いまでして、いたんですね、後十年といわず、六年したらあちこち分け合つて御馳走になる時期が来たんですよ。

ほんとに米須の場合は、何戸百戸とどううちは建つていたのに、うちが一戸もない、屋敷も平塗になつてゐるし、山城さんのうちには崩されました。あのうちの材料は三和役所に使つたんです。あれも惜しかつたです。あれは全部、楓とイクという木で作った立派な家でしたからね。でも、主はいますよ。主はいますが命令ですから、崩されちゃう。でも、主はいますよ。主はいますが命令ですから、崩されちゃう。戻り上げられてしまつたんです。今の米須を見たら戦前以上ですが、あの当時は何ともいえないのでした。

引きならされて、全然境界もない土地、認定委員さん方がちゃんと書いて下さったのは、有難いと思います。一坪、二坪の差は出たと思ひますが、そな間違はなかつたと思います。今の米須を見たら戦前以上で認定委員は、戦前の図面は何もありませんでした。そんな広い畑をされたいたんです。

うことになつていますからね。その日からちよつと六日間は食糧取つたり、水を汲んで置いたりしました。

そうしたらこのカナリラ鐘乳洞には、軍の病院ができたわけ。大きな鐘乳洞ですからね、で、千人くらい入れる。その時に、僕はこの部落の内容はよく知つていました。それで軍の病院の方から、あなたはこの部落のことによく知つておるので、水を考えてくれないか、といわれた。

このサイパンというところは水がとても不自由のところなんですね。地下タンクでしたが、艦砲射撃で、全部そのタンクは割れてしまふんですからね。それでちよつと僕が知つたところのうちには、タンクの半分くらいありましたね。それで屋敷の木の根にロープをくくりつけて、一斗罐を持って行ってそのタンクの中に僕が下りて、上方には女の方に頼んで引き上げて貰つたんです。そしたら、そばに立つてゐる避難民が、全部飲んでしまつんですよ、その水は。でも僕は、一時間くらいそのタンクの中に入つていました。みんな喉が乾いてるから、腹いっぱい飲ましてから、一斗罐のいっぱい汲んで、病院へ持つて行つたんですがね。そしたら、病院の病人がドンドン、ドンドン入つて来るんです、負傷者が。入つて来ながら、明日は、たしかにあしたは上陸して来る、この鐘乳洞は占領される、民間人は突破しなさい、といふ命令ですよ。残つたのが約三十名くらいの負傷兵だけです。あくる日の晩まわつて行つて見ましたら、手榴弾や瓦斯弾を投げ込まれて、そのまま死んでいました。

それから戦車の音がドンドンするんだからね、みんなジャ

グルの中へ逃げるんですよ。僕は家族みんな「伏せ」させたわけであります。だが機銃弾で三つになる子供の足の中を貫通して、それから家の内の右の脛から機銃弾が入って、左のお股から出たわけですよ。そうして左手のこの指（母指）がなくなつておるんです。頭の皮がこれくらい、ぱつと取られたわけ。それでわたしは、妻の手をしばりつけて、あまり出血がひどいもんですからね、こっちで倒れさせてしまつたんです。僕は言いましたよ、兄貴に。「あなたたちは子供もなし助かるまで助かって……、僕等はこの防空壕にいるから、後は考えてくれね、といつて兄貴等夫婦を行かしたわけですよ、後の始末をして貰うために。僕はその前に足をやられて、しばらく歩いていたんだ。閑節だつたら歩けないがすねの中間だったでの歩けたんです。

それで兄貴を突破させて、その翌日は妻がお産したんです。お

産は軽くやつた。だが女がお産の時の後産といいますか、体力がないもんですから、それを出すことができない、運も悪くて。三時間くらい経つたら、そのまま息を引き取つてしまつたんです。その日は妻が亡くなつて、翌日は三つになる子が亡くなつて、赤ちゃんは四日目の晩に命が落ちましたね。四日間何も与えないので、生きていまつたがね、赤ちゃんは。

それで妻が死んで七日に、妻子が死んだと聞いたといつて兄貴が僕のところへさがして来たんですよ。「だが戦争だから、あなたがたが来る希望ならこつちへ来なさい、食糧はいくらか取れるかがたが来る

ら、だが行きたいなら行きなさい」と僕は言いましたよ。そうしたら、兄貴たちは、「お互様だから、ここで子供の面倒を見てあげよう」といつて止まりましたがね。それで、ちょうど今二十九歳になれる長女です、嫁に行っていますがね。その子があんまり元気なもんですから、しめ殺さなかつたんですよ、うちば。その子は下痢もないですね、余所の子は下痢して、ポコポコ全部死んでしまはん。この子は、草の葉っぱまで食わしだが、下痢しないんですね。の子は元気ぴんぴんだからそれよりも生き残った方がいいと思つて後では、僕は死ぬ氣にもならなかつたわけです、その子の顔を見て。

それで六月の十日の空襲から約三か月経つた九月十二日ですか、捕虜取られたわけです。捕虜取られて、その時からは、褲もないんですよ。恥もないで。着た着物はあるでバラバラでしよう、ジヤングルの中から何か月も逃げ廻つていますから。

それで、知つた朝鮮の人最初あつたわけですよ。沖縄の日本人は、いいわけです。それで知つた朝鮮の人が、「ああ、あなたの元気だつたね」、「うん、元気だつた、あなたの家族は全部元気が」、「うちは家族全部元気だ」と話し合つたが、その朝鮮の人は、日本本人みたいだつたんですからね、前はお互い交際して、いました。

それであの人、ズボン四枚に、上衣四着持つて来て、それから着物がきたが、自分は一着も着けないです。全部といてしまつて、子供の着物に直して、余所の奥さんに縫つて貰つてですよ。それでも僕は約三百二十円裡に縫い込んであったので、その金はくらいやりましたが、そこでもできないといつてまた新川に戻りました。

そうしたらアメリカは馬天（佐敷村）の方からも来るし、那覇からも来て、三方から新川は囲まれて、袋の鼠みたように、もう出ることもできぬし、連玉森にその晩は行きましたが、そこからも逃げて来て、その晩に南へ逃げなけりなりました。

最初新川へ行きました時は、負傷兵を新川の野戰病院へ運んで來ましたよ。その途中に艦砲が落ちた。われわれの分隊は三十名ありましたが、四人で一組ありましたよ。一番前の組が、直撃に当つたんです。坦いで来る時ですね、自分等は道から歩いたら、また直撃を喰うから煙の中を通るうといつて、煙の中を通つて歩いたら、隣りのものがまたやられたんです。助けてくれえ、というが夜で誰も助けませんよ。艦砲がドンドン雨のように落ちて来るんだから。そして病人を坦いで来て、また明る日も連玉森へ負傷兵を運びに行つたら、迫撃砲を目の前で撃つんでですよ、アメリカがですね。その時の自分の分隊長は上等兵でありましたが、友軍だ進みなさいといふんですよ。わたしたちは、あれは敵だからといって、木の葉を被つて伏せして置こうといつてましたよ。そんなら自分

最初軍に徴用されたのは、新曆の七月であります。恩納村の山田の山奥に、食糧運搬でしたが、朝の八時にこつちを出かけたら、翌日の八時にこつちに戻つて来て、一日は休む。また翌朝の八時に出かけてその翌日の八時に帰つて来るというようにやつていたんですね。その食糧運びを一週間ほどやつて、またその後、壕の材料ですね、軍の准尉が班長になつて、三十台くらいの馬車が並んで、宜野湾の普天間で昼飯を食べて、向こうから読谷村の知名役所まで行って、向こうで夕飯を食べてですね、山田の方へ行って、そこで材料を積んで朝の八時にはここに着きおつたんですよ。

この挽馬隊といふのは、いか所に持つて来るのではなくて、何台は真壁、何台は豊見城といつて分配してやりおつたんです。十月十日の空襲までは、ずっとそれをつづけておりましたが、その後に防衛召集が来まして、馬車も馬もいっしょに召集されましてね、富盛（トモリ）の方へ行つたんですよ。富盛で自分等が寝る飯場をつくつて、昼中は竹槍を持って訓練してですね、それから空襲が盛んにやつて来て、それにつづいて北部の方から米軍が上陸したということになつ

が行つて見ようと先頭になつて、三間くらい前になつて行つたら手榴弾でやられて、すぐ一間ぐらい上から飛んで散りおつたんですよ。

その兵隊はね。それからもう逃げなければいかんといつて、いっしょに逃げたらやられるから一人ひとり逃げようといつて、自分の新川の陣地の方へ。照明弾が上る時は、われわれは運玉森の頂上だから、上からくる転げて下まで落ちて、照明弾が消えた時また、走つて歩いて、また照明弾が上つたら伏せて、そうして陣地まで帰りましたが、その後からは怪我人運びには行かなかつたんですよ。運玉森からの負傷兵運搬はそういうわけで一回しかできなかつたんです。その時は運玉森の友軍の壕はすべて潰されて、兵隊はもういなかつたんです。

そうして弁ヶ岳というところは、もう友軍は鉄砲は持つてゐるが坐り込んでいて、何もやらないんですよ。弁ヶ岳へ行く時は、爆弾でしようね重かったから。力のない人は棒にくくりつけて二人で持つて、力のある人は、一人で背中にくつつけて持つんですが六十キログラムぐらいはあつたでしような。そうして運んでいる途中、飛行機から花火みたようなのが落ちるんですよ。その時は、爆弾といつしょに散つてしまふなという気持ちで、苦しい思いでしたが、そうちして行つたんですが、わたしは、考えなければいかんと思って、わたしは首が動かなくなつてゐるということを隊長にいつたんですね、そうしたら、「お前たちの土地を守るためにそれくらゐは何でもないから頑張れ、死んだら國のためである」と隊長はいつておるんですよ。そういうが、首は動かないんだから一日くらい休ましたら、また動くかもしれないから一日くらいは休まして下さいといつたんです。その時は運玉森の友軍の壕はすべて潰されて、兵隊は

もういなかつたんです。

そしたら明日から出て働きますからもう一日は休まして下さい、が、わたしはまげてゐるのだから、直そうとすると、あいた、あいがんぢる（右か左に片向けていたこと）のを直そうとするんですが、わたくしはまげてゐるのだから、直そうとすると、あいた、あいた、痛い、痛いといつて、わざとまげてゐるんだから、そしたら軍医は、一日くらい休んだらお前できるかといふから、一日くらい休ましたら明日から出て働きますから見てはいませんが、自分の分隊は、もう一人も戻つて来ないんですよ、

自分の分隊はこの晩で全部全滅しましたよ。弁ヶ岳へ上るうとしていた一班、二班自分の分隊は夕飯を食べようとしている途中に直撃を受けて、全部やられたそうです。うちには行かないんだから見ていませんが、自分の分隊は、もう一人も戻つて来て、そん

た。  
そんなら軍医のところへ行つて手術して来なさい、といふので、

そうしたら軍医は穴の中になりますよ。その人は頭をつかまえて、ゆがんでゐる（右か左に片向けていたこと）のを直そうとするんです

ら負ふしますといつて、いっしょに真栄里まで來ましたがね。途中で罐詰を開けて食べてしまいました。箱の中の数量は減つても、箱があたつていれば同じもんだから、歩きながら食べないと歩けないといつてみんなやりましたがね、三十名余りの人間全部罐詰一箱ずつ与えて、その真栄里の前の陣地へ運んだ。

真栄里の前の陣地へ來たら、糸満の北がわからアメリカ軍の海陸用戦車といいますか、ドンドン上陸やりますよ。上陸やるのが見えなんだから。夜は連隊本部の壕掘りに行って、昼はめいめい隠れていて、蛸壺掘りですね。約十五日間くらい、そういう生活でした。

そうしてアメリカの軍艦からこつち見えるんだから自分の入つているそばに直撃が落ちたんです。そして破片でわたしはこつち、鼻やられたんです。鼻のこつちがゆるゆるになつてきましたよ。そうして手でそこをおさえて、陸軍の野戰病院の方へ逃げて行つて、薬をつけて絆創膏でくつつけて、隠れておりましたが、それから三日という時に、お医者さんが、歩ける間は解散するから、歩けない人は仕方がない、めいめい自爆しないと。そしたら歩けない人は泣いておる。みんな大声を出して泣いていましたよ。歩ける人間は、溝のそばなどからもお尻でいさつても出て行きおつたんですがね。

うちは逃げて真壁の後の米須の前の壕へ最初は行きましたが、向こうへ着いた時は、もうちょうど夜が明けていました。朝の六時頃でありましたかが鉄砲も捨てて、家族のところへ行かねばならないと思つて甘蔗畑から逃げて来ましたが、逃げて来て、二日という時に捕虜取られました。野戰病院は、真栄里の前の伊敷の川ですよ。あ

の川が野戰病院になつておりました。伊敷の人人がつかつてゐる井戸のそばに壕があります。自然壕で大きな壕ですが、名はないですね。

六月の二十日の十時頃、米須の前の壕で捕まえられましたがね。家族は、部落の後におりましたが、わたしが逃げて來た時は、兵隊に、こつちから出ないと斬つてしまふぞ、といわれたから、父親だけは歩けないのでこの壕に残して來たそうですよ。そしてわたしは逃げて来て、朝、もう家族は全部壕のそとへ出ていたんだから、それで、こつちにいては全滅するから壕をさがして來ようといつて、家族はちょっととした盛り土の陰に隠れさせて置いてですね、飛行機が機銃で、道から歩くもんだからバラバラやりおつたんですから、甘蔗畑の中に、死んだ振りして倒れていて、寝ておつたんですね。そしてわたしは壕をさがしに行く時、もう八時をすぎていたが、敵の飛行機が機銃で、道から歩くもんだからバラバラやりおつたんです。そして飛行機がもう静かになつたから、起きて壕をさがしに行つたら、その壕に三十戸数くらいの家族が入つていましたよ。もうこちらは入ることができないよ、といわれましたが、まあ命を助かることですから、われわれは立つておつてもいいので、一晩だけ泊めてくれといつて、この壕に入つていて、明けた朝捕虜になりました。

捕虜になる時は、最初は、わたくしは兵隊の服装だから、出て行つたら殺されるから、妻子にお前等は出て行けといつて出しましたが、あとで殺しはしないから出て来いといふので、真裸なつて軍の猿股一本つけて出て行きました。そしたら、兵隊であったかと訊くので兵隊ではないといった、そんなら防衛隊であったか、いや防

衛隊でもないとわたしはいうたんですよ。そうしたら、二人の米兵が胸に鉄砲を突きつけておるのだから、もう死ぬのだな、もう死んでもいいから、と思って、わたしは兵隊ではない、農民であった、と日本語でいうたら、「ウソツイタラ、カゾクゼンブ、コロス」こんなにいつたので、「殺すなら殺せ、わたしは農民であった」といつてがんばったから、その時には「糸瀧行け」というたんです。そうして、子供一人は必ず負んぶしなさいといつて、七つくらいになる子供を負んぶして行つたんですよ。こつちから伊良波までずっと歩き通しで。

伊良波でまた調べますよ。途中でですね。女の方には食べ物をやるんですよ。わたしも腹がへつておるので食べたいもんですから、少しぐれといつたら、「ノウ」といつてくれないんですね。くれなかつたからそのまま裸になつて歩いたんですが、溝に水溜りがあつたんですよ。それで負んぶしている子供の顔があまり汚れていましたので、石鹼をつけて、その子供の顔をこの水溜りで洗つてやつていたんです。そしたら靴を穿いている足で、わたしをうんと蹴るんですよ。何んでこつちでそんなことをやるか、といつて。それでわたしはもう逃げたです、裸になつて。そうしたら後で追いかけて来て、石鹼は持つて来てくれた。そうしてわたしは後を見ないよ、列組んでいる女の中に入り込んでね、自分ひとりになると撃たれるから裸かになつて女の中に入つていきましたよ。

捕虜になる時、わたしは家族に、びくびくしないでお前たちは行きなさい、わたしはもう死ぬかもしれないからね、子供たちを立派に育てなさいね、とそれだけは言つてありましたよ。

米軍が食事を与えた時、最初は女たちも、子供たちも、毒が入つておるといつて食べませんでしたよ。米兵が食べて見せたから、みんな食べるようになりました。わたくしは、途中でも、伊良波でも米軍はくれませんでした。

わたしは、山原へ行く時から人から貰つて食べた。米軍は少しもくれませんでした。

伊原から糸瀧までも歩いて、糸瀧から伊良波までも全部歩いてですよ。糸瀧までは家族といつてしまつたが、糸瀧で別べつになつたです。伊良波へ行つてから、沖縄の通弁が、嘘言つたらお前死刑になると

いうておるんですよ。その時わたしは四十二歳でしたかね、体格で兵隊に行つていると見られたんでしようね。わたしはしらを切つて、わたしは嘘を言わない、兵隊でもない、防衛隊でもないよ、と沖縄の通弁に言つたですが、そしたら、嘘を言つたらすぐわかるからね、嘘言うと死刑になるよと沖縄の通弁がいうんですよ。

そうしたら、飯もくれないで裸で三日おりましたよ。水だけは与えました。

山原へトラックに乗せられて行くことになったので、わたしは知つた人もいないし、逃げようかと思つたんですが、最初は金武のですね、大山の方に。ぶらぶら遊んでおる中にまた避難民が来たので惣慶の方に。惣慶では豚小屋に床を敷いて寝泊りやつておつたんですよ。そうして向こうで班をつくつて、わたしは班長として、何万人という人が集まつておるんだから、避難民の小屋を作らんといかんといつて、三十人ずつ班を作つて材木伐り出しに班長として行き

ましたよ。配給の罐詰は、普通の人は一つだがわたしは班長だから二つ、そして一週間に一回ずつ、宜野座の病院に三十名ずつ掃除しに連れて行きおつたんです。僕は班長は、二箇ずつ握り飯をくれおつたんですよ。普通の人夫は一箇ずつですけれど。その時は肥るような気持でしたよ。それで自分一人大きな握り飯を二つ食べるわけにいきませんから、病室を廻つて、自分の部落の病人や年寄りなんかが入つておつたんですよ。それでそういう人に分けて上げたんですよ、一つは。

わたしの長女の学校での友達といつて、惣慶の事務所に事務取つている娘さんがおつたんですが、その女の子が、あなた山城さんではないですかといつたので、そうだよ、といつたら、あなた方の竹子さんは具志川村の前原のトンガマーといふところにいらつしやいまので、あなたあそこへ行かれる方がいいですよといつたから、ああそうか、わたしはあちらこちら手紙は出しておるが、どこへ行つておるのかと思つて、もうこつちに捕虜なつているのだがといつた。そうしたらこの娘さんが、そんならわたしが手続きを取りますから早く行きなさい、といつたので、お願ひしますといつて、その翌日、前原の方へ疎開しましたがね。向こうは御馳走がうんとありますよ。山原はもう何もなかつたんです。それでいろいろの草なども食べていましたよ（前原から、泡瀬へ行つて家族といつしょになりましたよ）。

言い漏らしたことを少し話します。わたしは挽馬隊の班長をやりおりましたが、民間の牛を取つて来てですね、馬もおりますがね。同じ友輩であつても、盗みに行きますよ。当番の者が牛を二頭

盗ましたので、わたしは炊事曹にたたかれましたがね。班長たるもののが役は立たないで、牛を盗ますかといつて、顔をたたかれて、どうもこうもできないくらいたたかれましたがね。それでわたしはその時の自分の班の当番に、お前は眠つていたために牛を盗ましたのですから、今晚の中に他の隊から牛を盗んで来いといつつけたのです、その晩にまた牛二頭盗んで来てありました。そうしてわたしは寝たんですけど、寝たら自分の帽子を取られてしまつて、もう大変なことになつたと思ったんだが、星もとられてしまつて。防衛隊とは言わさないで、これ見なさい、星がついている二等兵であるといつてましたですが、その星を盗まれていいよ大変なことになつたと、困つたことがありました。同じ軍隊だがこの方（同席の大屋さん）たちは八重瀬の上で、わたしたちは轔重兵で富盛の道のそばに壕を掘つておりました。

重傷者の兵隊についても、知つておるだけ話しましよう。破片でやられた負傷者、足なんかやられているのを、こつちへ運んで来たが、最後は捨てて来ましたよ、弾に当つた人を。それを運ぶのが危いから。

それから陣地に来て、負傷兵をわたくしたちに運んで来なさいといつましたよ。それで自分の分隊でないからわたしたちは出来ないと断りました。そうしたらその分隊が行つて運んで来ました。運んできたら、もう足が切れ皮だけにかかつていて、水飲ましてくれとしきりに水を求めるので、軍医が、これは出血したかと、訊くんですが、運んで来た人が、まあ出血は相当にしていました、というたら、そんなら水を

やりなさい、といって、水を欲しがるだけやつてから注射やりおつたんです。出血はしておつても、大して出血していなかつたといつたら、その人には全然水を飲まさなかつたです。そうして治療やりおつたんですが、そういう人は、戦はここまで来ておるし、こういう人は、歩いて逃げることはできないから、そのまま全滅したんではないかと思います。自分等が見た範囲では、そんなものであります。

米須は名城へ移動しましたから、こっちの遺骨収集は真和志村の人があがやりました。最初に入つていきましたのでね。

わたしは自分のうちは残つておつたんですよ。うちを見に来たら豚小屋ですね、豚小屋の方に五、六名人間が焼かれてあつたんですよ。自分のうちは瓦葺だつたし残つておつたので幸いだと思つたんです。真和志村の作業隊がですね、三十人ほど、CPといつてその時いましたね、その方がたが来てうちは崩すといつて來たから、崩すのを止めてくれ、せつかくわたしの家は残つてゐるんだからといつたら、今頃、お前の家といつてあるか、これはすべてアメリカのものだから崩して、これは配給してお前たちの家は造るんだ、だから崩すよといつて、崩そうとしおつたんですよ。

それでわたしが一人の手を摑まえて、人の財産に手をつける法があるか、戦さは敗けておるから、自分の財産は後は自分のものになるとのだから手をつけてくれるな、といつたら、三十名の作業班がそとに出て、手をつけなかつたんだが、CPを呼びに行って五、六名CPが来たんです。

そして「どこに坐つてゐるか、捕えて金網に入れよう」というの

あるし、そのまま軍の洋服をつけて、靴も穿いてゐるものもありました。皮骨だけ残つて、骨と皮ですね、肉は腐つて骨と皮がくついているのがありました、それはどういうわけかといいますと、出 bleedの多いものは腐れないそうですよ。兵隊は四、五人も重なり合つて、ミーラのようになつて転んでいました。それは、ずいぶんありましたよ。米須のうしろの按司墓といつてあります、その墓には約一か年位奥いがありましたよ。あれは字民が魂魄塔に持つて行つたんです。

最初にわたしが部落に來た時の部落の遺骨は、大変でした。わたしの家の中にも二人亡くなつていきましたが、豚小屋にいた六、七人はガソリンで焼かれておりました。あれは、男と女とわかれましたがね。女の方は髪と襦が残つてしましました。首里の方だったそうです。うちはタンクがありますが、それに屬れていたそうです。タンクは今でも修繕もしないで使つていますからね、タンクの中にいれば助かつたんだが、タンクは暑いといつて出たのでやられてタンクにいた人は助かつていますよ。家の後に艦砲の直撃を受けおりますからね、その破片でやられただらうと思うんですよ。

拝み屋なんかもつれて七、八年前に、首里から見えていましたが、あの後からは見えません。どういう方で、なんという姓名といふこともわかりません。

大田ハル(二十五歳) 主婦

三月二十三日 空襲がはじまりましたから、個人で部落の裏の山

で、わたしは、捕えられて金網に一週間も十日も入れられてはたまらないからといつて真壁の方へ逃げたんですよ。そうしたら追駆けて來たんですが、わたしは駆け足は早いので摑まえられませんでしたが、もう仕方ないから壊させてしまつたんです。わたしの家は上方ですので一軒だけ残つていたわけです。

最初わたしは、部落を廻つたり土地を廻つたりしに來たわけですよ、名城に來てからですね。一日来たらCPが道の境界に監視しているので、そんなところから來たら摑まえられるから隧道からうちへ廻つて行つて見たら、その時までまだ遺骨収集はしてなかつたんです、最初だから。魂魄の塔は真和志の人々が作つたんです。真和志の人々が収骨したのが一万何千人といつてました。あの魂魄塔ですね、あれ最初は上は開けてあつたんです。頭だけ入れてあつたんですが、開けて金歯なんか、またアメリカ兵が頭蓋骨など取つて行くので三和村の役所の方で蓋を閉めましたがね。わたしたちが引越して行つてから。

註、わたくしは(筆者)昭和三十一年東京から三十六年振りに帰郷して魂魄の塔に参拝した。塔の屋根になつた東面の中ほどに収骨口があつて、中の遺骨が見えないくらい、まだ上部には余裕が大分あつた。一年後の翌年また参拝したら、納骨口が塞つて、も早や納骨する余裕がないようであつた。その納骨口は、さらに一年後参拝した時にセメントで塗り込めてあつた。

その残りをこの部落が遺骨を収集しました。人の屋敷にあるものなんかですね、部落で収集したもの相當に出ました。

最初に來た時には、全部ありました。もう白骨になつてゐるもの

の下に壕をつくつてありましたから、向こうへ逃げました。八人家族です。男はみんな防衛隊に行つて、女と年寄りと子供、自分は六つをかしらに數え四つになるのと、八か月の乳飲み児をかかえてですね、お母さん、主人の妹が二人、こうして七、八名逃げたわけです。

その日は向こうで一日過して、二日目から艦砲射撃ですね。前の海は真黒くなるまで、アメリカの船が浮かんでゐるんです。

そしたらその翌日からこの米須部落は、どんどん火が燃えていりますね。自分たちの家も三日目からは焼き払われて、何もないんです。そうして四日目の時ですね、友軍の兵隊が、どうせ米須の浜から上陸するのだから一日や二日でも生き延びた方がいい、真壁の村避難に避難しなさいといったというので、うちらはこんなに子供と年寄りを抱えて困りますから、もういいんです。いつしょにこつちの壕で死んだ方がいい、といつたんだですが、そうではないですよ、子供たちが可哀想じやないか、悪いことは言わない、というので、そつでしようがね、といつてゆっくり準備して行きました。

真壁の部落の近くには壕が二つ三つもあるが、そうして上の方は大きな壕で大勢の人が入るということであつたが、そこもいつぱいになつて入られないというので、自分たちは細い道から行つたから、狭い道の片一方に並んで坐つた。

自分は、八か月の子を抱えて、両方の腋に子供を抱かえて、坐つていたんです。そしたら上方から若い夫婦が、自分たちより年は上だが、子供はできてなかつたから、身軽で夫は小さい釜に御飯、妻は小さい鍋にお汁を沸かしてね、うちら親類ですかね、挨拶してもただ笑つて通つて行つたんですよ。

それを見てわたしは、もう苦しくなつて、昔の人が生まない子にあわれを語る人はいない、というのはほんとだね、子供を抱えて身動きもできないでしよう。ほんとに苦しい思いをしましたよ。

詰、子供を持ったことのない人には子供を生んで育てている人の苦労はわからない、という意味であろう。

そこに十日くらいいましたかね、そこでは暮らし方（生活）ができるので、また元の壕へ戻って行つたんです。そうしたら、わたくしたちが蓄えてあつた避難用の食物を、友軍が全部平らげてしまつて何にも残していないのですよ。大豆を煎つてですね、砂糖を入れておむすびをつくつて、壠の中に、またお米も入れて置いてあつたら、全部平らげて、散らかし放だい、散らかしてあるんですよ。漬物類も、大根漬、ニンニク漬、ラッキョー漬など、友軍の兵隊が全部平らげて、何にも残してはいけないのです。

でも仕方がないから、自分の壕でじょら、こっちで生活することになったから、夜、夕方大抵六時頃から食糧集めに出たら、そのころはキャベツや人参の時期なんですね。それを集めたり、お芋なんか掘つて來た。食糧はあつたんですけども、八重瀬岳の米倉庫が焼けたという噂を聞いたから、笊にカマスを敷いて、畚で損ぎに行つたんです。わたしと十六歳になる姉妹がおりましたので、向こうでみんなないところをわけ合つて、それを壕に持つて来て、奇麗にして、それとお芋とを食べました。少し曇り天気だなという日は弾があんまり来ないで、いい生活だったんです。

水もどんどん流れるところがありますので、行水をして、洗濯もし、いい生活をした。朝は早い時はトンボも飛ばないから、朝も出歩いたかなと思った時に大きな弾がずどんと落ちて、煙が立ちこめて、そこに生活していたんです。

そこも激しくなつたので、壕さがさなくてはといつて、そとへ出たんです。その山道を出る時に、同じ部落の人と出合つたもんですから少しの間立つて話をしたらですね、自分たちが話して一足二足歩いたかなと思った時に大きな弾がずどんと落ちて、煙が立ちこめて、そこに生活していたんです。

出て行く時、子供は畚に坐らしてですね、トランク一つありますから、トランクの上に子供を坐らして、またちょっと食糧があるのですがね、壠に入れて。

「へーえ、おばさん、今から、そんなもの担いてどこ行くんですか」

「わかるもんですか」といつたら「なにいい」といつて手の掌を喰わそうとしたから、「何んですつて、あなた方ばかりが兵隊ではなくつてよ、うちらも、主人もお舅さんも防衛隊に行つているから女が子供を抱えて途方に暮れているんですよ」といつたら、知らん振りで逃げて行くんですよ。

でも占領されているもんですから、仕方がないから、また部落へ上つて行つた。自分たちの屋敷には、豚小屋をコンクリートでやつてありましたし、それからタンクは水を全部出して、そこに衣類類と食糧類を入れてあつたら、うちに戻つて来て見たら、友軍の兵隊が大きく穴を開けて、それを敷いてこっちで生活していたようで着物を全部腐らして、つかえるものは何にもなかつたんです。

そしてこっちでも、出たり入つたりしている間に、どんどん激しくなつたので、ここでも生活出来なくなりました。それで裏の山のてっぺんの岩と岩の間に、戸を持って行つてですね、上に擬装して、そこに生活していたんです。

ここも激しくなつたので、壕さがさなくてはといつて、そとへ出たんです。その山道を出る時に、同じ部落の人と出合つたもんですから少しの間立つて話をしたらですね、自分たちが話して一足二足歩いたかなと思った時に大きな弾がずどんと落ちて、煙が立ちこめて、そこに生活していたんです。

るんですね。またトンボ小が来る頃からは、壕の中に入つた。あのトンボ小が来ると、かならず弾がザーアーと来るんですよ。だからあれをよく注意して見ないといけない。

自分たちは麦も植えてあつたので、自分たちの麦刈りに行って、もう準備して担ごうとする時、低空して来て、ダ、ダ、ダーと土ぼこりを立てるんですけど、でも運がよければ当らないですね。こういうふうに生活していたんですね。だからわかれわれは出て行つたらどうしますか」

「これからわれわれは出て行つたらどこへ行きますか」

「民間は石垣の陰で木の下でも結構だ、兵隊がいなかつたら、国はどうして守つて行けるか」

「どうしても厭ならどうしますか」

「たたき切るまでだ」

「そういつついました。

わたしたちの壠の隣りにおじいさんとおばあさん、孫一人いてうちの部落の人ですけれど、長男は防衛隊にいっている。このおじいさんおばあさんはどうしても出ない、入りなければ殺してから入りなさいといったそうです。そうしたらたき切つてやろうかな、と長い剣を持っている兵隊が言つていたそうです。だからうちちらも吃驚して出る準備をしました。その時からおばあさんもいらつしやらなくなつて、自分たちばかりだったんです。おばあさんは壠のそばで艦砲に当つた。その時は非常に激しかつたですからね。

そこから引き上げて、野戦病院の壕に引っ越して行きました。そうしたら、六月の十九日から黄煙弾を毎朝二回も三回も入口から投げるんですよ。そしたら窒息するみたいに呼吸もできないんですね。四、五十人くらい住民はいたんですけど、それでみんなはもつと下へもつと下へもぐり込んだんですね。

うちは乳呑み児を抱えているもんだから泣きもするし、みんなにすまないとも思はし、みんなから下りて来るなどと言われておるし、上の子供二人と、そうして一週間飲まず食わずで四名おりましたよ。うち等は、野戦病院は上方でそれと十疊ぐらいの広場でした。こっちに自分等が入って行った時は、看護婦たちは、喜屋武した。方へ突破して行って、空っぽになつていきました。

でも上で生活する人はいない、みんな下に下りてですね、恐いんですから、毎日毎日黄煙弾を投げ入れるもんですから、みんな苦しいから下へ下りて行つたが、自分たち親子四人は上に坐つて、仕方がないですから、また子供が泣くもんですから、うちの子供が泣いたら下から怒鳴るんですから、子供が泣いたら住民だなあといつて、いいはずなんだがなと思つたんですが、仕方ないでしよう。

一番最初に黄煙弾を投げられた時には、水を汲んで桶につめてあるから、それに着物を突っ込んで濡らした着物をうちの家族にやつてくれといつてうちの主人が手渡ししたけれども、前の人人が取つてしまつてうちには届かないわけさね。そうして四つになる子も少し小さいから低いところに煙は来ないわけ、煙は上に上がるはず。自分たちは窒息しそうでも自分は片手は口と鼻、片手は乳呑み子、上の方はまた叔母さんが、こうしてみんな口をおさえておるけれど

も、この四つになる子は静かで何ともいわないで気になつて、そうしてうちが少しイキができるようになつてから正次と呼んだら、「はい、うん」というので元気だねと胸を撫で下してね。最初の日は。一日に三回も四回も投げ入れるので、何回くらい黄煙弾を投げ入れられたかわからぬ。

「デテコイ、デテコイ」というが、壕ではあんまりよく聞こえない。病人は自分たちの近くに寝ていてから、病人たちが、「デテコイ、デテコイ」といつておるといつておつたけれどもね、みんな恐がつて出ないもの。みんな下へ下りて行って。

ちょうど一週間目の朝ですね、昼だったかな。上方に、出口の方にですね、爆弾だつたんでしょうかな。土ほこりも立つて、破片も飛ぶし、飯盒も小石もわたしのところに飛んで来て、わたしの乳呑み児はその時に亡くなつたんです。破片に当つたんです。そうしたらみんなびっくりして、もう出よう、出ようといつて、その日に出る覚悟をしたんですよ。そうしたらわたしはね、何で出るくらいなら一日や二日、もっと早く出なかつたか、そうしたらうちの子は死ななくてよかつた（涙声になる）。わたしはそう思いました（泣く、涙を拭いてつづける）。

一番最初に出た人は、家族づれで突破するというていたんだが、

四、五十人アメリカの兵隊が来るから、どうしても突破はできない

といつてまた壕の中に戻つて来たんです。そうしたら壕の上に整列して出ていたんですけど恐くなつて、うちの子持ちだからといつて最初にまた下りて来たんです、壕の中に。

そうしたら、「デテコイネエチヤン、ナンデモナイ、デテコイ、

したから、アメリカの兵隊さんが禮詰やらお菓子やら持つて来て食べさせた。またお年寄りと子供はトラックを持って来て先につれて行つてしまつて、若い男の人は、病人を担つぎにまた壕の中に戻つて来たんです。

子供と年寄りと引き離すわけだなあといつて心配しておつたんですけど、やつぱり伊良波でですね、先になつて待つておつたんで

す。

出た最初は、一列に整列させて鉄砲をつきつけていますので、殺す考えだと、みんな裸え上つておりました。男を裸にしたのは、手榴弾でも持つておるのではないかと思ったんでしよう。

壕を出ることになったのは、手榴弾を投げられて、わたしの子供が死んだので、壕の中で殺されるより、出て殺すなら殺された方がいいとみんなが相談して出たんです。その時がわたしは一番苦し

かつたんです。出るならもう一日か二日早く出れば子供を死なさなくつよかつたんじやないかと、わたしは反抗したんです。

壕に入つてた時十九日の朝でしたが、水を汲んで帰る時、兵隊が怪我をして血をだらだらしておつたが、水を下さい、といつて來てなかつたんです。取ることはできなかつたんです、恐くて。自分たちはトランク一個持つていて大変だから、壕の中に入れて置こうといつて四千円もある時のお金であったが、持つて持つとしたら、「コレ、汚イ、アメリカ上等アルコレ捨テナサイ」といつて持たせませんでした。アメリカの兵隊でしたが、日本語ができました。

それから米須の前につれて行つてですね、あそこに幕舎がありま

る。その行く道すがら、伊原部落（旧摩文仁村）の木の下あたりは、枕を並べてね、家族づれでしようかね、七、八人も安心して眠つて

いるみたようでした。またイレー（現在宇伊原の一部）の東がわの

井戸のそばには、大きくふくれた兵隊さんが寝ていてるしね。そうして池のそばにも何十人という人が転がっているし、道は、みんな死人でした。米須部落も相当の人でしたよ。自分たちは、伊原の東の壕から出たんだから、部落は伊原からしか見ないんだけれどもね。もう伊原の部落から、あちらこちらから釜に米を入れたままひっくり返して、また着物もそばにあって、立派な着物を取らうと思えばいくらでも死んでいる人のものを取ることができました。死んだ人のそんなものが散らかっていまして。

そうしてこんなにして波平（はぢや）の後まで病人担いで、そこからトラックで伊良波へ。トラックの中で、全身焼として、ちょっと動く度に痛い痛いして泣くのは見られませんでした。

伊良波から野嵩へ行きましたが、野嵩には宜野湾のうちを壊わす作業の人しか置きませんので、うちは女ばかりですから、一月くらいは野嵩にいましたが、古知屋開墾に移動させられました。あっちは食糧もないし、うちは自分たちで仮小屋をつくって、地面に茅を敷いて寝起きするのでしたが、トランクに羽織を入れて持っていましたので、これを布団の代りに被つたりして暮しております。

そのころ茅刈り作業がありましてね、ずっとずっと山奥へ行つて茅刈り作業をしていましたが、名護のアメリカの兵隊が来てですね、うちと、七十近くになるおばさんと、少し知り合いであったもんですから、下におりて行って、茅の多いところで茅刈つておきました。そうしたら名護から来たアメリカ兵二人来てですね、ういたのを見たわけです。

自分たちの壕は少し下だったしね、あの時だったんだろうと思うんですが、お母さんがやられたのは、あの壕にいた人はみんなやらされました。お母さんは、壕の口でわたしたちは、中にいましたから。

黄煙弾でやられてから、一週間くらいいた。わたしたちが出たのは、八月二十五日ですから、水を飲まさなかつた兵隊は、水を飲ましてくれといつて五日くらい後、捕虜になつた時そこに死んでいたのを見たわけです。

### 山城のぶ（二十歳）　志村大隊本部炊事

最初は武部隊に、区長さんが連絡がありましたので、それは十月十日の空襲前だったんです。半月位は働いて、山部隊に引きつぎされたんですよ。それで山部隊に入つて、あなたたちはずっと炊事して下さい、といわれましたから、女五名働いたわけですよ。昼は米を揚げたり夜は水汲みで御飯を炊いたりして、昼は毎日米揚きばかり、長い間働いたんです。わたくしたちは山部隊の本部だったんですよ。

戦争が激しくなつたら、各中隊から一線部隊が本部に入つて来て、送り出しますよ。こっちも山部隊の本部から一線部隊に出たわけです。兵隊さんも二、三名残つて、山城（旧喜屋武村）の志村部隊の本部の壕で働いたんです。後で移動して、米須のクシンカーの壕に来たわけですよ。あっちでずっと炊事しました。壕の中にかまどをつくつたり、米を揚い

ちのところでぐずぐずいっていたんです。だから言葉がわからないもんだから櫻え上つて、知らん顔をして茅を刈つておりました。

そうしたら上に登つて、二十二、三くらいの娘を二人ですね、引つ張つて来るんですよ。そして二人大きな声を出して泣いてね、わあわあ泣かして、一人は二人は死んでもいっしょだよ、といって泣くし、一人はどうせ仕方がないじやないかと割り切つているし。一人はわあわあ泣いて、「助けてえ」といつて、死ぬならいつよだよと大きな声を出して、それを聞いてからは、自分たちは高い山に木が沢山生えているけれども、こっちはどうして歩いて登つたか知らないよ。名護から来たアメリカ兵ですよ。

そうしてMPに云つたんですよ、白か黒かとくくんですよ。MPは、白といったらなかなか行かないんです、一人では。そうしてMPも目をキヨロキヨロさせてさがして、そうですね、半時間くらい経つたんじゃないですかね、名護からの兵隊が五、六名になつているんですよ。やつと助け上げて来たんですけど、もうあの時わしらがもう少し若かつたら、深い谷底であつたから大変だつたんです。

そんな恐しい生活をくり返しかえして苦労しました。一人の娘は恥かしめられはしなかったんです。一対一ですから、あの木につかまつたりこの木につかまつたりして引張り合つていました。掘立て小屋をつくつて、苦しい生活でした。作業に出ても握り飯一箇ずつ貰うだけでした。

お母さん（姑）は、破片で頭ですからそんなに苦しくなく亡くなつたと思います。うちの隣りの東がわの壕も直撃を受けてですね、石部隊の炊事をやつたんです。われわれ炊事をしているものは、ずっと壕の中にいて炊事をしていますので、そとの状況はよくわからぬないです。水も壕とくついたところにありましたので、水汲んでいる時でもそとの状況はわかりません。

六月十九日の晩に解散になりました、兵隊さんも。それで壕を出ようとしたら、馬乗りしているんでしよう、アメリカーが。それで兵隊さんは先に出て、わたしたちは後に出ようとしたら、出ようとすると兵隊さんが、みんなやられるんですよ。それで大変だから、炊事壕にまた戻つて行きました。

壕で二、三日暮していたら、アメリカーが入つて来て、われわれの壕が弾でやられたんです。兵隊もいつしょに火は消しましたが、あの時は、女五名ここに生活しています。御飯もないし、水汲みも出来ないし、大変だったんですよ。そこで怪我しました。

怪我しているので、この壕では治療もできないので、突破するつもりでそこに出たら歩けないんですよ、四名。五名の中から一人はそのまま死んだんです。壕の中にアメリカーに弾を入れられた時に、即死ではありませんで、物は言いましたが、わたしも足、こんなに怪我して破片がまだ入つてますよ。

四名出たら、一人はまた手をやられたのです。それで米須学校の門のところに泊つて、別の壕へ夜明け前行こうとしたら、この人は出血が激しくて、もうわたくしはどうしても行けないから、水を

飲んで死ぬ、というので一人だけ残して別れたんですよ。この人はその日に捕虜取られて、宜野座の病院へ行つて、そこで無くなつているんですよ（片方の手が切断される。徳元文子さんの記録にも出している）。

三名は壕さがしにあちこち歩いていた中に一人は頭、一人は足の指を怪我しました。

一人は足の指を無くして、ゆっくりゆっくりは歩けるが、二人は歩けないんですよ。壕さがして歩くが、どこに壕があるか、わからんないんです。それで、こつちで眠つたり、あっちでも眠つたりして、もう髪も土といっしょになつて済茶苦茶なんですよ。一人は看護婦（徳元文子さんを指している）であつたので、鍼持つているから二人交代して髪も切つて、丸坊主になつたんですよ。

それから三名、大渡（旧摩文仁村）の後のアマンソーラというところへ行つたんですよ。その壕には死んだ人がいっぱいしていたが、この壕に入つたんですよ、わたしたち三名。それでこつちで一人は破傷風になつて死んだんですよ。そうしたら二人になりました。この二人は生きても死んでもいっしょだから、水もないし食べるものもないし、わたしが傭つて烟を行つて、芋も取つて、甘藷も取つて、それを食べて約一ヶ月位暮してゐたんですよ。煮たものはちつとも食べないで、水と生ま芋だけかじつてですよ。

破傷風で一人は死んだから、この死んだ人のそばで、二人約一ヶ月くらい暮していたんですよ。どうしてもこんなにしていてはいけないから、そこに出て、太陽も見てから二人はいっしょに死んでいいからといって、そとへ出たんですよ。そうしたら人も見えない

し、飛行機も静かになつて、何もいないんですよ。そうして二人は大渡部落へ行つたわけですよ。あつちへ行つて太陽も見てから、坐っていたんですよ、二人。そうしたらアメリカーがトランクを運転して私たちの前方を通るのです。手を上げたがアメリカーは乗せません。またもトランクが通るので四つの手を上げたが、またも乗せない。三回目に乗せるといつて止めたんですね、上りなさいといつて手真似でやるわけです。だけれども怪我をしてるから上ることができませんよ。それでわたしがゆつくり汗もだらだらかきながら先きに上つて、また一人は手をつかまえて上つたわけですよ。

具志頭を通して、それから百名に収容されたんですよ。あつちに行く途中、ガムをくれたんですが、毒が入つておるといつて食べないといつて手でやつたら、自分から食べて見せましたよ。またわたしたちも貰つたが、包みのまま食べないで持つて行きました。

百名へ行つたら、知つた人もいない、親類もだれもいない、米須へ行つて死んだ方がいいね、といつて泣いておつたんですよ。頭から背中、足へかけてやられてアマンソーラにいましたが、百名へ行つても何も出来ないで、田圃へ水汲みに行くのにも二人喧嘩したりして、配給だけ食べて生きていきました。

百名へ行つて、軍病院で治療しました。アマンソーラは大渡の後にあります、大へん大きな壕ですよ。わたしたちが行つた時は、死んだ人はいっぱいでしたが、生きた人は一人もいませんですよ。今五名の中から三名は生きています。

アマンソーラに入つたらウジ虫がドンドン出るんですよ。この足のウジ虫を取ると、この足がウジ虫がむずむずするんですよ。わた

したち二人はウジ虫が出たが、死んだ人はウジ虫は出ませんでした。四、五日したらあれは破傷風になつて死んだわけ。わたしたち二人は、ウジが出ているので、破傷風にはならなかつたですよ。

わたしたち二人は、饅詰の空罐に水を溜めて、それに塩を入れてかけたらウジは出るんですよ。ウジ虫はね、大へん大きかつたんですよ。

わたしは、戦前にお父さんお母さんは本土へ行つていましたので、わたしたちは、おばあさんに育てられていましたよ。兄さんと嫁さんと。それでうち、おばあさんも、兄さんたちも全部亡くなつたんですよ、戦争のために。それでわたし一人生き残つてしましました。お父さんとお母さんが本土から帰つてから家族がいっしょに暮らすことができました。

壕にいた時は、生芋と甘藷と水を飲んでいましたが、わたし一人が、傭つて芋と甘藷を取りに行くのです。一人は足の怪我がわたしよりひどくて歩くことができませんから、わたくし一人で行くんですよ。それが夜でしよう。二つの足怪我ですから、四つの足（手のこと）で歩くわけです。傭つてですね。兵隊が手榴弾も持たしてあつたんですよ。非常に苦しい立場になつたらこれでやりなさいといつて。もう苦しいのでは、わたくしが止める。あとはこの手榴弾は捨てました、出る日に。一人は死んで一人は死にそこねではないからというので、やりませんでした。三、四回死のうとしましてた。

註、この方たちが解散になつたのは六月十九日で、その後もし

しばらくこの壕にとどまつていたというので、牛島、長の日本軍最高峰部はとくに自刃して、軍隊も避難民も大体捕虜になつている頃である。大渡の後のアマンソーラに三人が行つたのは七月になつてからだろう。

アマンソーラには、沢山の死人が入つていたという。その死人ばかりで、生きた人間が一人もいない大きい壕に、しかも真夜の中をやはりまづくらな壕に、女三人だけが入つていて。その上、一人は破傷風で死んで、死体のそばに二人の女が一月以上もそこにいた。死人を乗り越えて夜になつて四つん傭で芋や甘藷をとりに行く。生きた人は捕虜になつて人間が一人もいなくなつた世界で、夜の暗の中を傭つて芋を掘つて死人の骨を埋めたりする時の気持ち、この二人の一ヶ月の生活を想像すると鬼気が迫るといった感じである。

戦争、砲弾、爆弾より恐いものはないのである。死人の骨も、幽霊などといったものも、砲弾の力には消滅するらしい。

### 大屋清昌（三十五歳）防衛隊

若い男は大抵徴用に取られていたが、十九年（昭和）の四月二十一日頃からは、地元に残っている女といわば、男といわば、兵隊の壕建設や、歩兵陣地、高射砲陣地などの建設、それに戦車断崖などの作業が毎日つづけられた。兵隊の陣地や壕掘りは、男は鶴嘴で土を掘つたり、女たちは土を運んだり、戦車断崖の建造にも石を運んだ

り積んだり、ずっと年末までつづけ、年が明けると、軍の作業はいろいろと、ますます激しくなる一方であった。

わたくしは二十年の二月に召集されまして富盛の八重瀬の方へ行きました。そこでは、竹槍訓練などをしました。

そうして五月十六日か、首里新川の一戦場に移動しました。移動は一度にやるのではなくて、分隊によつて、三回にも四回にもやつたわけありますが、自分等は五月十六日だったんですね。爆弾を背負つて一夜の中に行きましたが、その途中で、難民の三十四、五くらいに見える女、母親が子供四、五名を抱いて、このまま道のそばに死んでいるのを見た時は、戦争が何ともいえない恐ろしいものだと思いました。馬も死んでいたが、生きている馬の二倍三倍になつて見えるんです。

そうして歩いている時に照明弾が上るでしょう。そういう時には、死んでいる人の上にも、死んでいる馬の横にも伏せをやるのです。そうして夜中歩いて、新川というところへ行きつきました。

行く途中、避難民の死んだのは、ところどころで見ましたよ。

それで爆弾を背負つて、竹槍を持って行つたんですが、新川へ行って、三十名余りのものの竹槍を壕の前に立てあつたんですね。そうしたら敵の砲弾で一晩でそれはやられてしまつたんだ、人間は何ともありません。

自分たちは、弁ヶ岳と、運玉森へ担架輸送していましたが、自分の戦友が、その途中で砲弾の破片で腕を切られて、後方へ下りましたが、われわれは五月の二十九か三十日頃まで新川にいました。その中に無線も全然きかなくなつて、あなたがた、お互、壕に下ろう

二名ですよ。六名はやられてしまつたんです。

自分は、自分の家内をさがして、米須の学校の東がわの自然壕へ行きまして、家内や子供にあいました。それでこの壕に二、三日滞在しましたが、そこを出ることになつて、女の子を二人、六つになる子は背中に、四つなる子は前にかかえて、家内はまた、小さい子を負んぶして、海岸へ抜けたわけですよ。

それから手榴弾を持って、自分の親類七、八名といつしょに、自爆やろうかという子供もおつたが、自爆はしない方がいい、という意見が多かつたですね、敵に捕えられても死ぬ、自爆しても死ぬ。それでわたしは自爆して死んだ方がよくはないかと思つたんですよ。

家内や、家の女親たちは、捕えられて死ぬならよからう、自分で死なない方がいいといって、女は手をあげて出た。でるときの気持ちは、目の前でトラクターで敷き殺されるという気持で出ました。自分等といつしょになつていてる兵隊もいましたが、これは引きわかして、あなた方は、僕らといつしょに来なさいといつて、真壁の前のコメスキというところがあるでしょ、向こうに集まつた。

あの時は僕は防衛隊の下着を着ていたでしょ、それで、あなたは防衛隊だ、というので、いえ、僕は防衛隊ではありませんといつたら、下着をさして、これは……といましたので、これは大変だといつてです、この池に捨てていいかと訊いたら、それでいいといったので、この池に全部捨てたわけですよ。都合のいいことに親類のおばさんが、自分の子供の褲を持つていたので、これと防衛

じゃないかというときに、部隊命令もあつたんですね。お互に壕に下つたわけですよ。無線はこれで連絡をとるのですが、上がらず、次第に切れて来て、全然きかなくなるので、行動もできないわけですよ。

新川での食物は米は相当ありますが、炊いて食べることはできませんでした。だから真里の前の壕に集結しまして、あの時に、病人がおるから、伝令三名はあなた方に命じるから八重瀬へ行って来いということで、三名、八重瀬へ自分の戦友を連れに行きました。行く時は、朝の飛行機がしきりに飛んでいる時で、盛んに弾も撃ちました

が、その弾の激しく落ちる中を通つて、八重瀬へ行きまして、壕八名そこにいて、晩の八時半頃いつしょに真里へ行きまして、壕で点呼もすみました。

その翌日、伊敷部落で点呼を取つてから、一線に各おの配置されてですね。真栄平の八重瀬の下で、一線切り込みですから、十名くらいずつ弾薬持つて、手榴弾持つて、配備されて、二、三日向こうで滞在した。そうすると、敵は赤・青・白で煙幕をはるんですよ。これは真壁の部落だろうと思ったんですがね、後から見たら。そうしたら弾も一つも来ないですよ。味方がいるので、弾を落してはいけないということではなかつたかと思います。

それでわれわれは、連絡も全然できないでもう今度は解散した方がいいと思つていると、敵に見つかつて、八名から生き残つたのは

隊のものと取り替えて、それで防衛隊の方には行かないで、こっちから糸満まで歩いて行つて、糸満からは、車で伊良波まで行つて、伊良波で一晩泊つて野嵩へ行きました。

野嵩で戦争は終つたわけですがね。あの時、自分たちの部落のことを想つたんです。誰だれは元氣で生きることができたかね、とひとりひとり思い出した時は、何とも言ようのない気持でした。

その後、百余名の班長になつたんですね、軍作業の班長で、みんなを連れて作業をするわけですが、着る物が、何もないから、アメリカさんが捨てる洋服でもあれば、洗濯すればいいのだから、そういうのを拾つて着るという情けない有様もありました。

野嵩に収容されていてから、また名城(旧真壁村)に収容されました。が、わたくしは名城に収容された翌日に自分の部落へ行つて見たんですよ。「これは自分の部落ではない、木も草もない、」自分の屋敷も分からなかつたんですよ。その場合の気持はほんとに、何んとも言ようのない気持でした。戦争というものは、恐ろしいもんだ、と何となくまらない気持ちになつたんですよ。

六人の戦友が死んだのは、アメリカ軍が真壁あたり、真栄平もですかね、あの青・黄・白の煙幕を張つてあつた前の日でした。軍曹が天皇陛下からの恩賜の煙草を三本ずつ配つたので、それをみんなが吸つたんですね。そうしたら、煙が出るでしょ。やられたんでですよ。一発来たから、またも三発は来るんだからと思って逃げたんですよ。やられた子供(青年)は、彼等は全部やられてしまつたんですね、物も言わないで。二人はまあ、水を飲ましてくれんかというので、後方へ下る時は、野戦病院へつれて行くから心配するな、と

いつたら、水だけは飲ましてくれといふので、水を飲めといつて水飲まして、逃げて来たわけですが。この二人には、あなた方を捨てて行くわけではないからといつたが、単なる気やすめの言葉で、あの時はそれより仕方なかったです。

一人の戦友が、もう死ぬより生きた方がいいのではないか、家内たちも見た方がいいじゃないか、自由解散しようといってやったわけですが、その時は日本軍はそういうふうになつていたんです。解散した時にはもう八名から二名だけ生きていたんです。

### 山城よし（三十歳） 家事

わたしたち家族は、ひめゆりの塔の南がわに自然壕がありしてそれを掃除してありますので、空襲が来たから、早く壕の中へ行きましょうといつて、荷物なんかまとめて行つたんです。

いつもは、空襲警報が鳴ると壕へ行つて、解除になると出て家に帰つていたわけですが、一晩壕の中に入つても解除のサイレンが鳴らないから、これはどうしたのかねと思ってみんな壕の中で、心配していると、二日目からは艦砲射撃が始まつたわけですよ。それでその日も出られない、その翌日も出られない。そこでこうしてはいけないから、食べるだけはどうしてもうちから持つて来なければいけないということで、夜はあまり艦砲射撃もありませんでしたから、夜になつてから、うちから荷物や食糧なんか集めて、壕の中に持つて行つたんです。三日目にはもう米須というものは全部焼け野原になつてですね、うちの木も全部燃えているんですよ。

その時、役所の方から壕の中へも、敵の上陸は前の海岸から来るから、山原の方へ逃げなさい」というふうな伝令が來たもんですから、これはもう大変なことになつたと思つた。うちのおじいさんの馬車に荷物を積んで、子供たちの手を取つて、この大通りの方を通つていると、どこもかも焼け野原になつて、大変大きな木が燃えているんですから、その火の中を、あつい、あついといいながら、うちのおじいさんの弟の家族や、親戚の人たちといつしょに、山原まではできなくとも、どこか行けるところまでは行きましょうといつて行きました。けれども東風平村ですかね、金良・長堂（豊見城村）といいますか、向こうまで行きましたら、向こうからもまた艦砲射撃が來ましたもんですから、これでは前にも進めないし、どうしようといつて途方に暮れていましたけども、もう引っ返すほかはない、これでは、どこへ行つても同じだ、前の方はもつと危いから後戻りしようということになりました、今度は八重瀬岳の方へ行つたんです。

そこにはうちの主人が防衛隊の小隊長になつていました。うちの主人は元兵隊で、昭和十四年に応召されまして、支那事變から大東亜戦争まで、働いて来ていましたから、戦争のことは委しくわかつておりますて、防衛隊の小隊長をしていますので、隊長にお願いします、いい壕を見つけて、そこに親戚みんながいたわけなんです。

そこにはいるまでは、食糧も夜は米須へ行つて取つて八重瀬の方へ持つて行つて、昼はまあ、壕の中にいて、毎晩のように夜は出て行つておりました。

これから戦さは激しくなりまして、もう日本の兵隊さんは、武器も持たないでドンドン、ドンドン南の方へ下るんですね。それで、うちの壕にも入り込んで来ました。その兵隊さんたちは武器を持っていませんし、中には既に兵隊さんもいれば、食べ物もぜんぜん持つておりません。その兵隊さんが、「兵隊というものは最後まで残つて戦かなければいけない、壕から出て行け、出て行つて住民なんか艦砲に当れ、」といふんですよ。

それを聞いた時はわたしは憤慨してですね、今まで兵隊さんたちも苦しいたたかいをしているのを見て、御飯炊く時でも、おばさん砂糖ありませんかという時などは、砂糖をわけ与えて、御飯もいつしょに食べてましょねといつて、わけて食べていました、といつて、今は苦しいけれども最後は勝ちますよね、といつて慰め合つてやつて来ましたのに、最後になつたら、住民というものは兵隊さんに、こんなにされるもんかね、と思ひながら着のみ着のまままでわざとち出されたんですよ、この壕から。

その時、餼節とお米を少し持つて出ようとしたら、これも、君たちが食べるもんではない、兵隊が食べるもんだ、君たちはそのまま出て行け、といわれたので「はい」といつて出たんだけれど、そ

れでまた小さい壕でもさがして入らないといけないといって、米須の部落の前的小山の中に小さい壕を見出でて、そこに隠れていたんです。

それで食糧がないもんですから、昼も構わず、芋掘りに出て行つたんですよ。うちの姉さんと、もう一人の叔母さんと、芋と筍を持つて芋掘りに行くところをですね。屋ですかから艦砲が目の前に来て、わたしたちは頭から土を被されてしまったんですよ。それで棒も笊もそこに置いて大変だといつて逃げようとしたらその通りでまた兵隊さんが、「君たちは伏せないか、もっと来るぞ、伏せよ、伏せよ」といわれましたが、もう恐くて、一生懸命走つて壕の中へ入つてしまつたんです。その時わたしは耳もやられてしまつた、と思いました。耳が四、五日の間、ぜんぜん聞こえませんでしたので、もう聴になつてしまつたのかね、と思ったんですけど、だんだん聞こえるようになつて、今は普通どおりになつております。

それから四、五日、その壕におまつたら、艦砲も来ないし、何も来なくなつて、静かになつたんですね。それで本土から兵隊さんが来て、戦さは勝つんだね、とみんな喜んでいたんですよ。そうして上の壕から出て、子供たちもつれて涼んでいたんですね。そうしたら畠の間の細い畦道からも自動車なんかも走つていれば、兵隊さんも歩くんですね。それで、これは日本の兵隊さんだといつて喜んでいたんですよ。そうして日本の兵隊さんがこんなにゆっくり歩いているんだから戦争は勝つているんだね、とわたしたちは、喜んでおつたのです。

それからまた、「マカベからイトマン行キナサイ、着物アル、食べ物アル」と言われました。その通り、真壁から糸満の方へ行つたんですが、真壁の前の池なんかには、二つ三つくらいの可愛い子が死んで浮かんでいるのもいるし、また大人が、俯せに背中を出して死んでいるのもいるし、道を行きながら、死人がですね、まあ死人の山ですね、そこのところを通つて、こんなにも死んでしまつたのかねと思ってね、見て泣きながら通つたんです。

その道のそばで、親もいない、捨て児にされたもんですかね、二つ三つくらいになる子が泣いているのを見たですね。これもアメリカ兵が抱いて、ひとりで歩いている元気な人に抱かせて、足の立たないおばあさんやおじいさんが道のそばに坐つていると、若い人をつれて来つた負んぶさせて、こんなにして糸満へ行つたんですよ。

そうして糸満へ行つて、女と子供と年寄りはいつしょにさせて、若いたちは別箇にしていたんですよ。それでわたしたちは、上陸用舟艇といいますかね、海の中から陸に上つて來るのがありますが、それに五十人くらいずつ乗せられて海に出るんですよ。

その場合の自分たちの話ですね、こっちで殺すのは何だから、海の中につれて行つて、みんな流してしまふんだ、溺れさせて、アメリカーが見物にするんだ、という噂が出たんですよ。それで、みんなわあわあ泣いたですね。こんなに流されるよりは自分等の部落の壕で死んだ方がよかつたのに、といつてみんな泣いているんですよ。

そうしたら翌日ですよ、わたしたちがまだ起きない前ですから六時頃ですがね、そのところに手榴弾をドンとやつたんですよ。

それで、みんな、ハッと目をさましたんですが、その時に犠牲者も出ましたよ、この壕の中から。うちのおじいさんは、こっちをやられ血もだらだらしていましたが、「出て来い、出て来い」といつて、すでにアメリカーが来ているんですよ、そこだ。「出てこい、出てこい」といましたもんですから、うちのおじいさんに、出て行つて見なさいといつたら、おじいさんが先に手を上げて出て行つたら、もう壕の中には入らさないんですよ。そして、うちの家族みんな出て来いよ、出て来ないよとまたも手榴弾入れるんだって、よ、とおじいさんも喚いているんですね、そと出て。

それじゃ、みんな出来ましょう、これは敗けたのかね、と思ってね、みんな捕虜されるのかね、とみんな懼えてわあわあと泣いてですね、それで壕から出たんですけれども何も持たないんですね。「ハダカデ出ナサイ、アメリカハ食べモノアル、着物アル、心配イライ、出テコイ」そういうんですよ。

それで子供たちを抱いて、そのまま出て行つたんですよ。そうしてちょっと歩いて行つたら、そこで罐詰なんか、いろんな食べ物を、男には煙草をくれるし、女子供には、罐詰やお菓子なんかいろいろなものを作れようとするんです。そうしたら、これ毒が入つているから、食べないでおきなさい、あなたたち死ぬよ、死ぬよ、といつて、食べさせないようになつたんですよ。そうしたらアメリカーはそれを開けて、自分が食べて見せたんです。そうしたら子供たちは安心して、喜んで食べていました。

その時うちの次男ね六つでしたからね、わたしは泣きませんでしたが、その子は、わたしのそばでわあわあ泣くんですよ。わたしは、「お前、何で男の子がこんなに泣くか、歯が痛いのか」といつたら、「歯は痛くない」、「それでは、なぜ泣くのか」といったら、「みんな海に溺れさせるというから、お母さん、僕は泳げないよ、僕は死ぬんだね」というから、「いや、死なないよ、お母さんは泳ぎは上手だから、お母さんがお前もこうして抱いて、三つなる女の子も二人を抱いても、お母さんは足を動かして陸に上るよ、心配しないで泣かないで」とわたしはそんなに言つたんですよ。そんなに話したが、沖の方へ行つたら、大きな軍艦にそのまま入つて行くんですよ。

そうしたら、どこへこれはつれて行くのかね、これは。このままアメリカに連れて行つて、沖縄人はこんなものだといつてあつちで見せ物にしてあつちで焼いてしまふんだという話もまた、出たんですよ。それで、もう死ぬんだねと思つて諦めていたんですが、けれど、大きい船の中に乗せられて、どこを通つて行つたかわかりませんが、また船の後の方が開いて、今度はまた陸に上つて行つたんですよ。

それで、死なないで生きることができるんだねと喜びました。そこは楚辺の浜といいましたかね、向こうに集まつたら、大勢の捕虜民がここにいるんですよ。そこでアメリカ兵に並べられて、トラックに乗せられた。その時また罐詰を二箱この人数で貰つて、中城の安谷屋といふところへ行つたんですよ。

の家に、あなたたちはこっち、あなたたちはこっちというふうにわけられて、それから配給も貰つたんですけれど、おもにそれは罐詰類ですね。米なんかはないですから、でも命が助かつただけはよかったです。そこで一日何十人という死ぬだけの人を埋めて土を被せて、またわたくしたちは農作業やらされたんです。この死んだ人は栄養失調と怪我人だったと思いますが、毎日毎日亡くなる人は何十人というので、穴を掘るのが間に合ないくらいだったような話であります。

そこに十日くらいいましたが、また移動して金武村の中川というところに行きました。そこへ行つたら、配給もないし、食べ物は向こうのようにならない。そこでは、栄養失調がまだだんだん殖えたわけですよ。配給ではどうしても足りないので、山羊が食べる草は、どんな草でもわたしたちは食べました。また海へ行つて、ホンダワラを取つて来て、これを醸詰といつしょに煮て食べたりしました。うちちは仮小屋で地べたに茅を刈りて来て敷いて、まるで動物の生活ですね。そういう生活を半年くらいしまして、名城へ移動しました。金武の中川は、人家がちょっとしかありませんから、山の中の道のそばに仮小屋をつくる、床がないですから、茅を敷いて寝起き

きました。冬になつても被り物は、毛布なんかありません。アメリカ兵は着物がある、食べ物があるといったが、そんな配給はなくて着のみ君のままでありますからね。それで自分たちで作業しながら、南京米袋などを拾つて来て、それを縫い合して被つておつたんですよ。

名城はコンセットでしたから、板切れを敷いて、被るのはやはり南米袋を敷いたり被つたり山原よりはよかつたんです。山原では味噌も塩もないので、海も遠いが海の潮を汲んで来て、それで味をつけて食べましたよ。桑の葉なんかはうまかったんですね。

#### 久保田 次郎（三十歳） 摩文仁国民学校訓導

国民学校（小学校）三年以上の児童はほとんど毎日軍へ協力の作業に出た。授業と作業とくわんぱいを取らねばならなかつた。

最初は道路の補修だったが、後になると、戦車断崖の石運び、石集めで、戦車断崖は戦車が走れないように石垣を積んで防害する作業である。だんだん児童たちの授業らしい授業は軍作業のためにできなくなつた。

増産は人手がないで、畑の空いているところは耕して、食糧を作つた。

十・十空襲の後、山部隊になってから、裏の山にて、陣地構築をしていましたが、そこにいる将校を使って、防衛隊の訓練に当らして

いた。自分たちは、青年学校の訓練に当つていたが、山部隊の大尉が援助訓練をしてくれた。

大隊本部は旧高嶺村になるが、大城丘というところにあつた。将校といつしょにそこへ行つたことがあつたが、自分たちは、大隊長は、懲懲に対したが、将校たちは減茶苦茶に叱られていた。

昭和二十年の三月六日に、自分たちは、白紙召集された。摩文仁村の助役も在郷軍人だったので、いつしょに召集されたが、軍籍の階級が自分が上だつたので、約九十名くらいの者を引きつれて、東

風平村の富盛の東、八重瀬岳の一段上つた松林に行つた。作業は戦車断崖の構築で、訓練は竹槍訓練で、防衛隊は仕事に行く時でも、竹槍は全員必ず持つよろに命じられた。

三月二十三日に空襲がはじまつた。恐い物見たさだ、丘に上つて、見ましたが、まだ艦砲は撃たなかつた。港川沖に軍艦はいたが、富盛へ行つた時に艦砲が撃たれた。しかし恐い実感はそうなかつた。

四月一日に、アメリカが上陸したことはわからなかつた。僕たちは、八重瀬の稜線に墓が沢山あるが、その墓を幾つかを改造してその中に、弾薬、砲弾、爆薬を沢山蓄蔵してあつたが、防衛隊はそれをトラックに積んで、南風原の新川に行つた。新川に持つて行つた弾薬は、そのままにして置いては危いから、煙の中の穴に埋めて置いた。墓の中にある物を出してそこにも入れた。僕が今考えるのに、敵は港川から来ると思って、南がわの新川に置いたと思われる。

それはちょっと前のことだが、僕が八重瀬にいるので、僕の妻

子、家族がそこへさがして來た。それで隊長に願つて、林の中の壕を与えて貰つた。そこは油脂類を入れる倉庫のつもりだつたらしいが、空いていた。それから艦砲が来るようになつたので、墓を一つ与えて貰つた。大きな厨子窓なんかも並んでいたが、奥の方は空いでいるから、墓も恐いと思わなかつた。死んだ人と仲よくいるという気持だつた。

新川に最初に弾薬輸送した帰り、七、八台のトラックが、五十メートルくらい間隔をおいて、走つて行つたが、将校が助手台に乗つていた。運転の兵隊が横腹をやられて、内臓が出ていた。死が迫つた時、最後の言葉は、「お母さん」とついた。

また第一線を行つて、病院に勤めた。弁ヶ岳へ食糧も運んだが、新川の後、大名、富城の線は、迫撃砲が雨のように撃ち込まれて、魔の十字路と兵隊たちが言つてゐる十字路があつた。運玉からは、毎晩十数名の後送者があつた。

そこ一帯では、弾に当る人が引つきりなしに出た。いつしょに行動していた喜屋武の人が片足を股から切られた。波平の山城氏は、即死した。後頭部は全部取られて、顔の皮が残つてゐた。骨も頬だけはあつた。

やはり新川の病院で別の日のことでしたが、病院の近くで、隊から来た上等兵が背中をやられて、そこで即死ではなかつた。

日本軍は後退で南に下つて、僕等も伊敷に來たが、仕事らしい仕

事は伊敷ではしなかった。道路の調査は命じられたが、軍では、移動するので、地方人が壊しているものは出せと命令された。これは真壁の東のアンガーラー壊というところだった。そこには、真壁で指導した隊長が、両膝やられて、お互に頑張らうな、といつてた。

僕が捕虜になったのは、六月二十二日であつたが、捕つて行く時、真裸の女が、大きくなつて、倒れていた。やられて三、四日はたつていただろうな。それから伊敷の壊の近くもひどかった。それは、他に見た人も話していたが、伊敷の前の烟は、烟全体が死人、手と足をみんな出していたといつてた。土が浅いためか、あるいは土を浅くかけたためかであろう。胴体だけ埋めて。

一般の避難民、中頭や首里などから来た人たちには壊がないので、学校の裏に割り取りがあるが、そこが唯一の避難所だった。橋の下などにもいたが、米須へ家族をさがしに来た時は、学校の道に艦砲に当つた人などが頭が切れているものいた。

どこを歩いても死臭がひどかった。動物の死んだのもいただろうが、ほとんど人間の死んだ臭いだ。

いませんが、集まつた防衛隊は何百人、あるいは千という数の大勢の人間でしたが、これは島尻出身者だけであったと思います。あまり人数が多いので、最初は一応帰すのではないかと思いましたが、そのまま、糸満小学校に一泊して、名城（旧真壁村）の船舶特攻隊に配置されました。

自分たちの仕事は、特攻隊の乗る特攻船といいますかね、それを夜間に、坦いで海へ運んだり、またそれを壕に戻したり、特攻隊が出る前の準備中、海の中に入つてつかまえていたりするのです。特攻船は大勢の人で坦いで出します。一人乗りですが機械が据えつけられており、爆弾も積んでいますので、重いんです。

夜中この特攻船を出して海の中でつかまえていますが、そのうち夜が明けますから、またもとのところへ運んで搬装します。特攻船は、名城の海岸は砂浜でありますから、海と違うところに置くのではなくて、砂を掘つて入れて、木の葉などで搬装して置くのです。

自分たちが行つて四日目ぐらいから、ほんとに出撃するといつて四、五隻浮べましたが、真中くらい（海上途中）から帰つて来るんです。機械が故障したとか、波が荒かったとか何とか言つて戻つて来ました。全部戻つて来て、また明日ということになりますが、明日が来ると、自分たちは船を坦いで出して、海の中でつかまえていますが、また途中から戻つて来て、自分たちはそれを坦いで壕に入れて搬装します。

その頃、アメリカの軍艦は、慶良間沖には来ているという話であります。機械が故障したとか、波が荒かったとか何とか言つて来ました。全部戻つて来て、また明日ということになりますが、明日が来ると、自分たちは船を坦いで出して、海の中でつかまえていますが、また途中から戻つて来て、自分たちはそれを坦いで壕に入れて搬装します。

時間いたかわからないが、医者の治療もないし、二日位は全然動けませんでした。腰ですが盲貫だったんですね。四五年前にこちらから出したんです。壕に十日くらいいたでしようね。

高良の壕が明日は馬乗りされるというので、負傷者は、歩ける人は勝手に出て行つて、動けない人は、そのままいなさい、という命令が下つたわけです。それでわたしは、家族と長らく別れていますので、その時からは歩けるようになつていたので、家族の壕へ行きました。米須に戻つたわけです。

壕は学校のすぐそばで、いつも家族は、そこにいた。ここはあの時は安全地帯ですからね。みんな大元気だと思つて来たんですけど、わたしが来た時に、母がやられている、家内が、三日前とどう変わつたのか、家内が死んだのは、話を聞いたら、ある部隊が、その壕を利用することになりました。地方民は兵隊が入つてから入るんだといふことで、そこで待機している間に、足をやられて死んだといふことありました。

わたしは壕の奥へ行きましたら父が、子供等三名、孫に当るものたちを前にしているんですね。そうしたら父が、おまえはもう行かないでもいいな、というので、もうわたしは怪我をしているから行かないでもいいです、といつたら喜んでですね、お母さんも亡くなつていて、おまえの妻も亡くなつていて、行かなくてよかつたら幸いだ、といったんです。さらに父が言った言葉に、「この鏑節は持つているんだけれどもね、水と取りかえてくれないか」と壕の中にいる人みんなに廻つて言つたけれど、全然替えてくれない。君は行かないでいいならよかつたね」と水は全然飲んでいないで非

自分たちは、使役といいますかね、何かをさせられるんです。運玉へ弾薬運びもしました。わたしが行つた時から非常に激しくなつてですよ、弾薬運びも一回しか行かせんで、高良（東風平村）の方へ移転命令が下つたんです。高良へ行ってからは、糧秣輸送だったんです。高良には、糧秣が沢山積まれてあつたんですからそれを配布する仕事です。その途中わたしは怪我したんですけど、怪我したので、そこにわたしは何

常に欲しいようであつたので、暗川（クラ川）といふところに水を汲みに行つたんだけれども、行く途中の死体は、もう死体の上から歩くくらいであつたんです。米須の後に橋がありますが橋の下にいた人々は直撃受けですね、手、頭、足なんか散らばっておるんですよ。

そういうところを歩いて、水を運んで持つて行つた時、この洞窟の中の両わきには、負傷兵が転がっているんですねけれど、こんな者たちのためにわたしの家内は死んだのか、と思っているので、水くれないかといふけれども、何をいうか馬鹿野郎といって、くれないで家族のところに辿りついたんです。そうしたらこの水はまた、この付近でいつときに無くなつてですね。一斗籠を持って行つて途中で持つて来る間にこぼれるから八分くらいはあつたんですね。水汲みに行つた時刻は、米軍の艦砲や爆撃が休んだ時でしよう、静かだつたですから。それで行きにはあまり人が道に死んでいるので、歩き難いので帰りは道を変えて来ました。

わたしの父の話にですね、お母さんは飯炊きに行って死んでいるんだから、君が行けるならば、行って見なさいといったので、わたしは親のことですからね、死ぬならいしょに死んでもいいというような覚悟ですから、早速行つたわけです。部落ですけれどもね。行つたら、碗を抱いてですね、ごはんとお釜は別の避難者が取つてなかつたんすけれども、お母さんは坐つたままだつたんです。坐つて、後に下つたら伏せがおくれるから、多分頭をやられたのではないかと思うんですね（坐つていたというので爆風によるのではないかと推察されるが、弾でやられても無理で亡くなつたり、大きな付近でいつときに無くなつてですね。一斗籠を持って行つて途中で持つて来る間にこぼれるから八分くらいはあつたんですね。水汲みに行つた時刻は、米軍の艦砲や爆撃が休んだ時でしよう、静かだつたですから。それで行きにはあまり人が道に死んでいるので、歩き難いので帰りは道を変えて来ました。

わたしの父の話にですね、お母さんは飯炊きに行って死んでいるんだから、君が行けるならば、行って見なさいといったので、わたしは親のことですからね、死ぬならいしょに死んでもいいというような覚悟ですから、早速行つたわけです。部落ですけれどもね。行つたら、碗を抱いてですね、ごはんとお釜は別の避難者が取つてなかつたんすけれども、お母さんは坐つたままだつたんです。坐つて、後に下つたら伏せがおくれるから、多分頭をやられたのではないかと思うんですね（坐つていたというので爆風によるのではないかと推察されるが、弾でやられても無理で亡くなつたり、大きな付近でいつときに無くなつてですね。一斗籠を持って行つて途中で持つて来る間にこぼれるから八分くらいはあつたんですね。水汲みに行つた時刻は、米軍の艦砲や爆撃が休んだ時でしよう、静かだつたですから。それで行きにはあまり人が道に死んでいるので、歩き難いので帰りは道を変えて来ました。

怪我でも生命に別条なかつたりいろいろあるので必ずしも爆風ともいえないそりである）。それでわたしはあれから仕様がないから、いい場所をさがして葬ろうと思つて、ちょうど艦砲の穴があつたので、向こうに運んで行つて、ゆっくり屋根をつくつですね。その時弾もドンドン落ちるんですけども、母といつしょな上に。しばらく寝ついたらこの洞窟の上に、弾が落ちたんですよ。それで、洞窟の天井から、石ころがバラバラ落ちるわけですよ。ちょっとわたしに落ちやられたんですよ。あの時にわたし考えました。若し死ぬのであつたら、こんな洞窟の中で死ぬより、海岸へ行つて、いい空気を吸つて、奇麗な泉（海岸に地下川の清い水が、南部にはあちこちにある）の水を飲んで死んだ方がいいじゃないか、と腹をきめたわけですね。

それで親戚の人たちに、わたしはこう考えていましたが、あなたたはどう考えてますかと訊いたら、わたしたちもいっしょに行きました。その時弾もドンドン落ちるんですけども、母といつしょな上に。しばらく寝ついたらこの洞窟の上に、弾が落ちたんですよ。それで、洞窟の天井から、石ころがバラバラ落ちるわけですよ。ちょっとわたしに落ちやられたんですよ。あの時にわたし考えました。若し死ぬのであつたら、こんな洞窟の中で死ぬより、海岸へ行つて、いい空気を吸つて、奇麗な泉（海岸に地下川の清い水が、南部にはあちこちにある）の水を飲んで死んだ方がいいじゃないか、と腹をきめたわけですね。

それで親戚の人たちに、わたしはこう考えていましたが、あなたたはどう考えてますかと訊いたら、わたしたちもいっしょに行きました。その時弾もドンドン落ちるんですけども、母といつしょな上に。しばらく寝ついたらこの洞窟の上に、弾が落ちたんですよ。それで、洞窟の天井から、石ころがバラバラ落ちるわけですよ。ちょっとわたしに落ちやられたんですよ。あの時にわたし考えました。若し死ぬのであつたら、こんな洞窟の中で死ぬより、海岸へ行つて、いい空気を吸つて、奇麗な泉（海岸に地下川の清い水が、南部にはあちこちにある）の水を飲んで死んだ方がいいじゃないか、と腹をきめたわけですね。

そこには住むことはできません。そこから五十メートルくらい南北へ行つたら軍がちゃんと射撃場として穴を掘つてありますよ。それでこっちに荷物を運び入れました。最後に、米一升と、鰹節一つと、また砂糖湯薬罐一ぱいと、これだけは最後まであつたんですよ。

一応、着換えなども向こうへ運んで、最後に砂糖湯を入れてある薬罐と、洗つてあつた米の入つていてまだ炊いてない釜を取りに来た場合にですよ、わたしが、後一分したら、向こう着くわけですよね、一間半くらいですから。またうちの父は、杖をついてよちよち北から歩いて来るし、わたしは北へ向かつて行く途中、あと一分の時間で向こうへ向こうとする時、ちょうどこの釜に直撃が当つたわけですよ。もう無いわけですよ、二人共伏せて怪我は無かつたんですね。珍らしいことですよね、この釜をさがしたら十メートルぐらい西がわに飛んでいましたけれど、マシキ（釜の底の中央）が取られて穴があいていました。もう米もなくなつて、それまでわたしは、飯も二、三日の間全然食べてませんでしたからね。二、三日振り飯も食べようと思ったのが、食べられなくなつたんです。

それからまたこの、壙に全部運んで、父と子供たちはこちらにおいて、わたしは考えたわけですよ。何とかしてこれから玉城付近へ行けないかなあ、と思ったわけですよ。一応様子を見て来ようねといつて、親のところを離れました。これまで計算した金が、細かいのを入れないで二千円でしたがね。この現金を持っていましたが、父に、金を枕にして死ぬという時期になつていますよ、といひました。

飯は炊くことができましたよ。

それから二百メートルくらい東へ行つたんです。兵隊なんかも向こうに集まつていました。ますます東は激しく全然行けないんだと言つて行ける可能性がなかつたわけですね。それで帰りに、あんなに喜んだことはありません。もう死ぬのは楽なことだと思って。それで帰つて行く場合に、あのいっしょに米を洗いに行つたおじさん。その死体をはつきり見ましたがね。あのよそのお父さんの死体を。

その晩にわたしは、手を合せたんですけれどね。わたしは、そのおじさんに、あなたみたように早くあの世へ行かして下さいと、お願いしましたがね。

それからうちの父のところに行つたら、お金はアメリカさんが来て全部持つて行つたよ、ということですよ。その時までアメリカ軍はまだわたしを見ていないですよ。百メートルくらい道がわを裸になつて行くのが見えるわけですよ。もうしまつたという時期になって、自決するほかはない、と思って、二つになる次男、長男が八つになりましたが、もう君たちは、この世に生れて、あのアメリカ軍にやられて死ぬより、もういっしょに死のうね、といつてわたしは桑の木の棒があつたもんだから、それを持つたわけですよ。もう死のうねといつて、そしたら長男の方が、「死ぬのは厭やだよ、死なんの方がいい」というんですよ。その時わたしは、この子供等を棒でつぶして、自分はまた手榴弾でやるうと思つたんですよ。

しかし一番珍らしいことは、わたしが感じたのはこの時雨が降つたんですね、こういう時になつても雨に濡れるのに、家があつた

荷馬車に乗つて行きました。恩納村の仲間に村の役所の世話係りも二人いたんですよ。

読谷の喜納の学校に一晩泊つてですね。このお父さんは、荷馬車を今日の中に持つて行かなければいけないからといって、わたしは喜納の学校に泊つたんです。またあつちから連絡があつて、子供たちは馬車に乗せる時は、自分は一人の子供を負んぶして、馬車といつしょに歩いて、ようやく仲間についたら、わたしたちが連れ行つた家族は、伊武部の兵舎に行つていたんです、七家族は。この人たちは兄弟が三人だったんですねからね。それでわたしも伊武部に行って、はじめはあつちで防空壕はいっしょに掘つたけれども、あつちの防空壕は土ですからね。

あつちはアメリカは四月二日に入陸して、五日頃からはアメリカ兵が山の中に入つて来たんですよ。晚おうちに帰つたらアメリカ兵が来てですね、だからみんな逃げ廻つて、あの時、五歳になる子も立派に歩き得ないが、わたしは二歳と三歳の年子があつたから、二人を負んぶして、追いつけないで、みんなに捨てられて、二晩は山の中に自分たち四人泊つて、防空壕に食糧を置いてあるからそれを取つて来ようと思って行つたんですが、そこに待つていると、あの人たちも食糧取りに来るだろと思って待つていたんですよ。そうしたら来たんですよ。そうして隣の家族たちといつしょに、一里

隣りの人が国頭の仲間というところに三月四日に疎開して、あの

当時は村の荷馬車を出してですね。荷物を積んで行つて、四、五日して、こつちよりはいいといつて食糧取りに來つたので、その時に、自分の荷物を積んで子供たちもいつしょに、隣りのお父さんと一緒に荷馬車に乗つて行きました。恩納村の仲間に村の役所の世話係りも二人いたんですよ。

読谷の喜納の学校に一晩泊つてですね。このお父さんは、荷馬車を今日の中に持つて行かなければいけないからといって、わたしは喜納の学校に泊つたんです。またあつちから連絡があつて、子供たちは馬車に乗せる時は、自分は一人の子供を負んぶして、馬車といつしょに歩いて、ようやく仲間についたら、わたしたちが連れ行つた家族は、伊武部の兵舎に行つていたんです、七家族は。この人たちは兄弟が三人だったんですねからね。それでわたしも伊武部に行って、はじめはあつちで防空壕はいっしょに掘つたけれども、あつちの防空壕は土ですからね。

あつちはアメリカは四月二日に入陸して、五日頃からはアメリカ

兵が山の中に入つて来たんですよ。晚おうちに帰つたらアメリカ兵

が来てですね、だからみんな逃げ廻つて、あの時、五歳になる子も立派に歩き得ないが、わたしは二歳と三歳の年子があつたから、二人を負んぶして、追いつけないで、みんなに捨てられて、二晩は

山の中に自分たち四人泊つて、防空壕に食糧を置いてあるからそれ

を取つて来ようと思って行つたんですが、そこに待つていると、あの人たちも食糧取りに来るだろと思って待つていたんですよ。そ

うしたら来たんですよ。そうして隣の家族たちといつしょに、一里が、インガーダン窟へ家族全部行つて、こちらは雨が降つても濡れないと思つたんですけど、その翌日はアメリカ軍が来て、出て来い、出て来い、というのでわたし一人飛び出たわけですよ。長男も長女もついて来ましたが、次男は父といつしょに、泣いているんですけど、れど、わたしも怪我しているし、その子はどうすることもできず、そのままにして来たんですけど。

これから三百メートルくらい行つた。お菓子なんか子供にくれるし、それからわたしは残した次男をつれに行き度くてならないから、言葉は通じないが、手真似で、小さいのがおるからあれをつれ来て来たいといったが、ぜんぜん許可してくれないで、それはどうなつたかわかりません。

詫、久保田清さんの家族は、妊娠九か月の子供まで入れて九名、その中生存者は三名、妊娠九か月の妻（二十九歳）。父、母、次男、弟（防衛隊）、弟の妻。その六名が戦争の犠牲になる。

### 儀間かつ（二十四歳） 家事

うちの主人は、昭和十八年六月四日に熊本に召集され、また次男坊が十二月十五日に生れたんですよ、十八年の（呼吸を詰まらして）。上の子が数え五歳で、三歳に二歳だったです。役所の方から國頭の方に疎開するよう連絡が来ましたが、十九年には戦死公報が来てですよ、北支から。二十年の三月四日には、疎開があつたんです。自分では頼る人がいないから希望だったんだが、お父さんが反対だったんです。遺骨が来たので、主人のお父さんがです。

半くらいの奥山を行つてましたよ。

それから十四、五日くらいたらまたアメリカ兵がこつちに沢山来てですね。あの時、子供にわたしは坐つていておっぱいを飲ませていたんです。みんなは逃げてしまつたが、わたしは帶を取つて負ふする暇もなくて、二人の手を摘まえて、帶は手に持つてました。そうして歩いたが、五歳になる子供が歩くことができないで、お母さんお母さん、といつて、いまましたが、わたしたちの前にアメリカ兵が三名待つてゐるんです。そうしてこの子供におっぱい飲ましていたから四名大きな声を出して泣き出しています。

そうしたら一人は、四ボイルのケイスですね、これを持つて、この子供たちにくれようとしたが、わたしは毒が入つてゐるから食べるなよ、といつて手で子供に知らしたが、その時から六日間みんなに離れてあの人たちがどこに行つたかわからなくなつて、六日間は何も食べませんでした。アメリカ兵は子供たちと四名が泣いたので、アメリカの兵隊は、何もしないで行きました。

その時は、小満芒種で雨が四日間降りつづき着たまま雨に濡れて、四名家族が、七日目に、夜ですよ、防空壕から荷物を取つて来て、自分たち四名が寝ついた上の方に休んでいたそうです。それでわたしたちの子供が夜泣いたから、儀間（隣家の方）の人たちは、あつちの子供たちが泣いてるものといつて、カツオ、カツオと呼びましたから、「はい」といつたら、あなたたちそこにいるんですか、今日はできないから、明日の朝連れに来るから、あしたまで待つてないさいよ、といいましたので、ほんとですか、あしたはつれに来なさいよ、と頼みました。山の中でですね。あの時まで

は、山の中で四名いっしょに死のうか、と諦めていたんですよ。

あの夜はね、みんなは生きているが、わたくしたちはこんなにして、みんないっしょだったのに、わたしたち四名こんなに、何も食べないで、夜の明けるのを待って、夜が白みかけたので、小さい子は負んぶして、一人は前から抱いて、五歳になる子は歩かして、川に行つて水を飲まして、あのお父さんたちが呼んだら返事をするんだよといつて、そうして荷物を取つて帰りにですね。「おむすび」をみんなから集めて、大きいの四つ持つて来てあつたんです。隣のおじさんとおばさんがです。

「あんたたちこれまで何か食べたか」といましたので、「いいえ」としたら、「あなたたちそんなに長い間何も食べないでは」といつて、道まではおじさんが、三歳になる子を負んぶしてつれて行つて、わたしは二歳になる子を負んぶして、行つたのです。

一里半くらいあつた山奥に、行つたらうちの食糧はなくなつて何もありませんからね。行つた日はあつちからもこっちからもご飯も持つて来てひもじくなつたんですが、そのつぎの日からは何もないんですからね。こんなにして生きていても何の甲斐もない、思つたんですが、あつちは馬車を持つて来ましたからね、馬に喰わすといつて、澱粉を取つたかすを口に入れて持つて行つたんですよ。

これを、おいしいものではないが命繋ぎだから、これを食べてね、といつてくれてあつたから、それを水につけて、罐詰の空罐に炊いて、食べました。また子供たちは、米を一升二合くらい人がら貰つてあつたんです。湯呑みの一杯ずつ一日に、それだけを三名にです。

十三日間は、人が捨ててあるのを拾つて、潮水を汲んで来て食べたりしてですね、後では潮水も汲むことができませんでした。

どういう間違いでしたか、島尻は安全だ、もううちに帰るというので恩納山には来たんですけど、恩納山に来たら島尻は激戦場だから行くことはできない、だがこつちまで来たからもうめいめいだよといつて、子持ちは二人だったんですから、二人はいっしょだったんです。隠れるのも、恩納山では。

十二日目にですね、屋嘉の人で三十六になるおじさんが、姉さん、この三名あなたの子ですか、といつてから、「はい」といつたら、「日本はね、もう見込がないから、わたしは七名家族ですが、妻と子供五名は石川に行つてゐるが、石川は米の配給も豆の配給もあるらしいからね、あなたたちがこんなに避難しても何も取り切れないから、あつちへ行つて、道はあつちだから、朝の八時までに着くようになつたから、これがあさつて、小さい芋を取つて生で齧つて、屋嘉といふところに出ました。食べるものはないで、ひもじいから、芋の蔓があつたから、これをあさつて、小さく芋を取つて生で齧つて、屋嘉ですかあの防衛隊がいたところは。あつちまで行つて、子供も負んぶして歩いて、行つたから、あつちからはまたトラックに乗せられて捕虜になりました。捕虜になつてトラックに乗つてから、箱に入ったもの（レーチョン食糧）をくれたので食べたら大変おいしいんです。トラックに乗つている人が、食べて何でもないことを教えました。それで、あの山の中でくれようとしたのはこれと同じものだった、こんなおいし

あげて、自分も食糧がないからおっぱいも出ないので、一つになる子が、あまり泣きはしないが、そううしくてですね、あの時からまたアメリカ兵が山に入つて来るものですから、おのの別べつに切り抜けるようにといつて、夜はいっしょですが、昼は別々に避難しました。あなたたちは子供が声を立てるから、ずっと遠くの方に行つていなさいよ、といつて、離れておつたんです。

自分たちは七月十九日に捕虜になつたんですが、六月二十九日かね、島尻は安全だからといふので、島尻に行くよ、ということになりました。六十名余りだったですね、村の疎開者は、集まつて係からこういふ話をあつたといつてですね、島尻に行くといつて、夜の九時から朝の六時まで、夜中歩いて、喜瀬武原を越えてですね、恩納山に行つたんです。そつしたら、あの時は荷物も着換えますが、それを頭に載せて、子供二人を負んぶして、また五歳になる子供には、小さい急須を持たしてあつたんです。転んで泣いたら死ぬよ、捨てて行くよ、といつて歩かしたんです。山道は狭いので、手も持つてやれませんからね、三歳になる子は栄養不良で恩納山で亡くなりました。

伊武部山ではですね。一ヶ月くらいしたから芋も掘られました。朝の三時頃から、見えないところまで松明をつけて歩いて、芋を掘つてまた太陽が上つたら山へ逃げて山に帰りおつたんです。あの時は、芋を煮て食べたり、大きな芋は、芋汁を作つて上げたりしてよかつたのに、島尻は安全といって恩納山に行つたら、恩納山では、島尻は激戦場になつてゐるんだと知らされました。そのち恩納山では、芋掘りもできなかつたですよ。

恩納山で亡くなつた子供は隣りのおじさんがいましたのでおじさんを呼んで来て葬りましたので、遺骨はよくわかりました。

恩納山で三つなる子は亡くしましたが恩納山にいて十三日目に捕虜に取られましたから。三つになる子は、恩納山でお腹が大きくなつてですね、手足は小さくなつて、栄養失調でした。女の子でしたわたくしの家内もあうかあわないかしらないが、といつてわたくしに二円預けてですね、わたくしの家内にあつたら渡してくれ、あわない場合はあなた使いなさい、持つていれば何となるだろうから、持つてしまつたが、石川に行つたらあのおばさんたちは石川におつて、そうしてわたくしが来たといつたら、おむすびも持つて来てですね、この晩は、晚だから配給はなかつたので、あのおばさんたちが持つて來たのを食べて、翌日から配給があつたんです。

石川の配給は一日に一人一合五勺、切升で。翌日は芋一斤ずつ、一日おきにそのように配給されました。それにウズラ豆も、五勺。あつち行つたらですね、星も見える、子供が泣いても何でもないといつてですね、こんなところもあつたのにそんなに長らく山におつたか、とくやしかつたですよ。

おじいさんと姉さんは、もう生きていても何のぞみもないといって、それに出て行って、飛行機から弾を落されて亡くなつたそう。

おはあさんはうちの防空壕へ亡くなつたそりです  
おじいさんは、わたしの主人も戦死していなないし、わたしたちも  
いないというので、生きていても甲斐がないといつて、そとに出て  
いたそうです。七十三歳になつてしました。

五つになつていた子は、今では大学を卒業して、八重山高校に二  
か年勤めて今は工業高校に勤めています。長男は農業しています  
が、子供が三人で、七名家族であります。

卷之三

主人は一月は宿泊石井さまでした。宿泊石井とレジンとておひでござ  
ましたが、戦争がこっち向かっているということで、もううちに帰り  
ませんでした。上の子供が九つで、つぎが七つと下が四つの三人で  
した。わたしは妊娠して七ヵ月なっていました。（涙声になる）わ  
たしはどうしてこの子供たちを守ることができるかと思つたんです  
が（呼吸を呑みながら）、みんなお母さんのいうことをきいてよと  
いいましてね。

それから三月二十九日の空襲が、壕に入つて、その時は、自分の実家の人たちもいつしょであつたから、自分の心もいくらかよかつたんですが、またほかの壕の生活、米須の裏に壕がありました。小さい洞窟でありますましたが、四、五軒親類方の人が入つていました。自分の家が焼けない間は、自分の畑に行って食糧を取つて、自分の

は四、五日くらいはいたんですけど、お臍から破傷風になって、五時頃くらいは泣き通しました。それでこの赤ちゃんどうして泣くのかねと思つていたら、次第に泣かなくなつたんですよ。おっぱい飲まうとしても赤ちゃんの顎が強くて開かないんですよ。おばあさん方もいられたが、おっぱいも飲まないならいいよ、幸いだよ、赤ちゃんは欲しいのはあるが…、とみんな言いました。こんな赤ちゃんなんか早く死んだ方がいいやと親類方も、みんな喜んだんです。次郎先生は、隣りでもあるし、同級生でもありますからね、お産を見舞に来られて、あの時の印象はいつまでも心に残っています。

お産をやつて十日くらい経つて、十三日になつたら、子供たちが目をキヨロキヨロしてこっちに坐つていますから、妹たちばかり使つてもいかないから、自分はモンペをつけて、もうしつかりして行こうねといつてね、十三日になつたら自分の部落に来て、前の畑に、芋はこっちにあるから、あの時は人のものからは取られませんでした。

たから自分の外に来て、手を介のしてはいとて、またこれを頭にのせて、あの時はお産して後ですからね、おなかに子供が入つておる時は、どんな荷物も重くなくて持てるが、ふらふらして、あの時の苦しみはいつまでも忘れられません。

家で煮て、壺を持って行くようにして暮らしていたんですよ。  
戦争前からも、港川から上陸するんですよ。こっちにはいられないんだってよ。八重瀬岳に行こう、早く八重瀬岳に行つた方がいいよ、というんです。それでこっちには兵隊さんが来て、あなた方はなぜ疎開をしなかつたか、こんなに住民が邪魔なってという兵隊さんもいたんですよ。

それで兵隊さんは後退でこっちに来ましたから、壕から兵隊に追い出されました。前の方からも港川からも上陸するというからどうに行こうかと迷っている時に、子供等が、みんな八重瀬岳に行くよ、八重瀬岳に行つた方がいいよ、というので、そうかといつて、自分の実家もいへしょに八重瀬の方に行きました。あつちはまだ焼けない家もありました。それでいい家に入つて、前の方にいい畑がありますのでそこに芋を作つて、それを一杯とつて笊に入れて、薪木も甘蔗がらがありますからそれを持つて、芋を入れた笊の上には野菜も持つて、それを頭にのせて、腹は大きくて（妊娠していること）あの当時の苦労だったたら誰にも言えない立場でした。

それで八重瀬の壕で、もう四月かね、三月かね、十四、五日ぐらくなつてお産をしたら、片隅でお産をして、妹たちが赤ちゃんのへそも繋いで、四、五日くらいは赤ちゃんは生きておりました。赤ちゃんは、浴びせないといかんから、妹たちに水を汲んで来るようになりますから、泥水ですよ姉さん、といいましたが、いいよ、泥水でもいいから早く汲んで来てなさい。バケツのいっぱいでもいいから早く汲んで来て、蒸籠につよく暖めたら浴びせることができるから、早く汲んで来て頂戴いと、自分は寝ているから、妹たちにい

わたしたちを追に出した兵隊たちは、單ざくばたのかおもひせんでしたので、もの壕に入ることができました。それから一週間ばかりしたら、また兵隊さんが来て、あなたがたは移動しなさいよ、早く移動しなさいよ、というので、もうこっちしか壕はないのにどこへ壕さがしに行くかね、と思ってね、そうして、じつとしていたら、うちの実家のお父さんが、うちの墓に行こうね、といつたので、そうね、墓に行つた方がいいね、といって、自分等の墓へ行くことにしました。自分等の墓に行つたら、墓には兵隊さんがいっていましてね。その隣りにまたオド墓といつて、昔のお墓ですが、口も開いたままで、遺骨もありましたね。そこは兵隊が利用していなかつたので、もうこちらに当分入つておこうね、でも海から艦砲射撃でこつちは一番危いね、と話しましたが、もうどこへ行くところがありませんから、こっちにいるほかはないから入つておこうねと入っていました。

「こちに一週間くらいいたら、またも兵隊さんが来て、「あなたがたは早く出なさい、あなたがたは何でこちにいるのか、早く出なさい、出ないとこの手榴弾でやるよ」といった。それでまたどこへ行つたらいいかねと考へて、「アカシンゴーに行つたら壕が沢山あるんだつてよ」という。わたしはあの時からお産もすんてしまつて男と同じだから、びくびくはしないよ、今度こそは、死ぬか生きるかだから、といつてまたアカシンゴーに壕をさがしに行つた。壕さがして自分のさがしてあつた壕は人に取られて、うち行つて帰つて来るまでに取られてしまつていたので、東徳門といういところが先きになつて壕をさがしてあつたんですよ。そうしたら、これは次男

という名で呼んでいたので、貴方の壕の片隅に立ちどうしでもいいから入れてね次男、命だけは助けてくれよ。今一時だから、といつて入ったわけですよ。そうして入つたら奥は大きい穴があつて四、五軒も入れるようなところだから、こっちに一ヶ月くらいましから離れていました。

この壕に行つた時は大変ひどかったです。食糧取りにも行けなくなつてね。芋葛と砂糖を水に溶かして、子供たちに飲まして、また大豆も持つていましたから、これを煮て。二十二、二十三日は、煮ることができませんでした。今から考ると司令官が自決するまでの二日くらいは煮ることができませんでした。そのあとからは、こつちに籠を並べて、煙は立たないかな、とみんなが見て夕方になつてから食べ物を炊きました。

司令官の壕が攻撃される二日間は、とても激しかったから、芋葛と砂糖を水に溶かして子供たちに与えていたんです。その時は炊事はできませんでしたよ。

九月に出ましたから、玉砕してから三か月くらいそこにいましたよ。あれからも苦労して食糧さがしに、わたしは男と同じで、子供たち三人抱えておるから、妹たちは、あなたの子供たちが食べるのだから、いっしょに早く行かないかというから、真壁の壕をさがしたり、真栄平の壕をさがしたり、食べ物があるかと思って。また畠から、里芋の葉を取つて来て食べたり、また芋の葉を取つて来て食事はできませんでしたよ。

いたんですよ。ゴージ(栄養失調にそういういたらしい)だといつて、大変だから戦車で轢き殺すという話があつたんですが、轢き殺すなら戦さだらいいさ、もう出た方がいいさ、といつて出たんですね。

ところがうちの四男、分家しているわたしの弟が、あなた方出なさい、わたしは行かないよ、といつて、出なかつたんですよ。自分の妻も子も出ているが、自分ひとり残つて、来なかつたんですよ。男は睾丸を取られて女はアメリカ兵にいたずらされる、オモチャになるという話がありましたから。わたしは行かないからあなたがたはいらっしゃいといつて出ませんでしたが、四日くらいして後に出ていますよ。

それから摩文仁のチン川といったですかね、捕虜取られてからはあつちに行つたが、アメリカは、お菓子も食べなさい、罐詰も食べなさい、といつたがこれは毒が入つておる、といつて食べなかつたら、アメリカが食べて見せてから食べなさい、食べなさいといつたので、子供たちは食べた、ひもじいんですから。わたしたちは食べませんでしたが、これはどうなるもんかね、と思つていました。

友軍の兵隊さんは、はじめは、日本から来て、アメリカを負かす、絶対に日本は負けないといって、出たら戦車に轢き殺される、女は、アメリカ兵のオモチャにされるから絶対出ではいかんといつていましたが、後で二世が来ていろいろ聞かして、わたしたちが出る時になつたら、いっしょに出て捕虜されましたよ。

水は、崖みたようなどころの岩に溜つていましたが、底から湧く

べたり、また他人の防空壕から豆ですね、豆のあるところからは豆をさがして、これを煮て食べたり、こういうようにして一、三ヶ月は暮していました。

でもアメリカさんが、こちらの前にテントを作っていたんです。五時後からはアメリカさんはいないから、うちは薄暗くなつて

よ。五時後からはアメリカさんはいないから、うちは薄暗くなつてから、取りに出て行くんです。

その頃にも友軍の兵隊さんがいて、「日本は絶対に負けないよ。絶対負けないよ、また日本から来るよ」といつて、アメリカの飛行機が飛んでいると、日本の飛行機でないかね、といつて、友軍の兵隊さんが出さなかつたんです。

そうして、無条件降服して、それからも長らくしてから出ましたからね。九月の十四、五日くらいだったでしょう。

それがわしたちを隣りの方が、「あなたがたもう出ないか、戦さばもう負けたつてよ、もう出なさいよ、さがしに来ているよ」といつていましたので、みんなは、これはわしたちの壕を敵に見せるために来たんだといって、悪口を言つてました。どうし

たらこの方は、あなたがたは出ないならないよ、といつて出て行きました。

その人が来て二、三日くらいして、わたしは出ようかなという気持もあつたが、アメリカでなく二世という人が壕さがしに来られて、こつちに大きな字を書いてあつたんですよ。「これも日本人だが、こんなにまでしてて大変だね」といつたが、みんなは出ない方がいいよといって、まいまごしてたんですよ。だがこんなにいつもでも壕生活をしていては、子供たちのお腹が、もう大きくなつて

年寄りは生きてはいらつしたが、戦争がこっち(その壕)に来てからは、誰も見ないでね、徳尻殿内よ、それからナカミーテラのおばあさんたち、自分等はこつちで死んでいいからといつて、このよな年寄りはいつ死んだかわかりませんが、死んでしまいましたよ。わたしたちの壕の隣りの壕にですよ。この方たちは下痢をしてね、こつちにはいっしょにできなかつたので、この方たちは、別べつにした方がいいといつて、年寄り三人は、近所には、お子さんもいたが、見ることができなくて死んでしまいましたよ。壕からそとに出て捕虜にはなりませんでしたから、多分食べるのもないから、そのまま亡くなつたと思います。うちのおじいさんは弾に当つて亡くなりました。

わたしたちは、親類四、五軒でいっしょに一つの壕にいました。

こちちは壕は沢山ありましたから、兵隊は壕は別のでしたよ。アメリカは早くから出て来い、出て来いと呼んでいましたが、何だ、かんだと、デマがありましたから、悪い話を聞かされて出なかつたんです。それは、兵隊からいろいろ聞されていましたからね。

わたしの主人は、そのまま帰りません。どこで亡くなつたかわかりません。わたくしの妹たちは、壕生活を長らくさせたためか、二人とも胸を悪くして、戦争後亡くなりました。捕虜取られてからコザの病院に入りましたが、年明けて間もなく亡くなりました。

壕から出て芋を掘りに行きます時ですね、米須部落の周囲はどこに芋があるとわかりますからね、また大渡の前でも、あっち（壕）

から近いですから、どこにあるといつて、四、五軒の方がた、十人くらいいっしょになつて、鍬を持って、男といつしょに食糧さがしに、アメリカさんは五時には帰つて行きますから、五時後から行つて、夜取ります。壕の生活が長いですから。

戦さにはね、わたくしあ産して後からこちらの壕生活している時は、子供たちに食糧与えるという時は、もう水汲んだり、あっちのハントップというところから、こちらのスー川に水汲みに男の方といつしょに、一斗罐を頭に載せて、うちに帰る時は、七分ぐらいしか残つてはいないでしよう。もう爆撃がドンドン来るので今度こそは死んでもいいというふうに、壕もないから死ぬ思いをしました。それから壕に来たら、今日も食べ物を取つて来たよ子供たちといつてね、御飯はないから芋を食べながら、お母さんは今日も命は助かつたよ、と話しながら食べましたよいっしょに。水汲みに行っても、食糧取りに行つても、わたしは男といつしょですからね。照明弾が上つたら艦砲が来ますよ、また海からもね、機銃も来ますよ。陸から迫撃砲が飛んで来るのが見えます。

当間（屋号）のそばに道があつたでしよう、あの道に沢山転んでいましたよ。あれは珍らしいなと思っていましたよ。一列に並んでみんな寝ていたよ。近所の人でしたからわかりましたよ。モンベ着けている方は、女の方でしたがこちらの方ではなかつたんです。避難民の方がただつたと思うんです。

また二、三日くら経つて、食糧運びに来たら、アメリカさん

が、もう占領していたから、片づけてその人たちは無くなつていったんですよ。

戦車が当間の下に二台あつたんですね、戦車と自動車と、うちも十人くらい食糧取りに男の方といつしょに行つたんですよ。そうしたら、前になつている人が電波探知機というんですか、あれを踏んで、わたしは一番後だつたんですよ。こつちは戦車の臭いがガソリンの臭いがしたんですよ。こつちは臭いよ、臭いよと二度いた時に、前の人人がこの線を踏んで、バンバンバンパン撃つて来るんですよ。あれは何メートルといつて撃つからしませんね。甘蔗のすぐこっちから歩いていた人がみんな倒れて、うちは、すぐそばに伏せたからね。助かつて来ましたがね。一晩の中に四人がね、やられてしましました。メーカシラ（屋号）の長男、徳明（屋号）の蒲（幼名）、ナク屋（屋号）のお父さんたちはあの時亡くなつた。電波探知機に引つかけたので機銃射撃でしよう。わたしの方には弾は来ないで、前方に弾は落ちていたんですよ。だから前の人たちは煙道の上を歩いていたと思います。わたしは、道を歩くと機銃掃射が来るようと思つましたよ。甘蔗は焼かれて幹ばかりが残つていて、それでも引つかかりましたから、溝を歩きました。それでずっとじつとして伏せておひつて、静かになつたので姉さんといひしょに自分の壕に帰つて来ましたよ。食糧は取らないで匂い匂いで、六月の二十五、六日に。待ち伏せしていたのだと後で思いましたが、わたしは溝のところを歩いていて、伏せましたが、前の人たちは煙道の上を歩いていたと思います。わたしは、道を歩くと機銃掃射が来るようと思つましたよ。甘蔗は焼かれて幹ばかりが残つていて、それでも引つかかりましたから、溝を歩きました。それでずっとじつとして伏せておひつて、静かになつたので姉さんといひしょに自分の壕に帰つて来ましたよ。食糧は取らないで匂い匂いで、六月の二十五、六日に。待ち伏せしていたのだと後で思いましたが、もう占領していたから、片づけてその人たちは無くなつていったんですよ。

した、大きな声をして歩いていましたよ。  
捕虜されてから百名に行きました。百名から名城に行つて、米須には名城から来ました。わたくしの子供は、上が九つで、つぎは七つで末ッ子が四つありました。

註、三人の幼児を抱えた三十一歳の戦争未亡人である徳元さんのその後の生活は、尋常ならないものがあつたと推察したが、時間の都合があつて、それは割愛せざるを得なかつたことは残念であつた。